
ココロの花

スクロール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロの花

【Nコード】

N8698M

【作者名】

スクロール

【あらすじ】

自分の表情と気持ちを表に出すことが苦手な女の子と、優しい男の子のお話。

『冷血王女』の続きのお話となっておりますが、こちらだけでも楽しめるようになっておりますが、『冷血王女』の方も読んでいただけたら、入り込みやすいと思います。前作に比べ、甘的成分増量中です。

8月19日 後日談をアップしました

前編

セミが騒がしく泣き喚き、草木も緑色を深くして生い茂っていてすっかりと夏の色を見せていた。春にはいなかった野球部員たちがグラウンドで汗を流しているし、吹奏楽部の練習の音が校舎中に鳴り響いてる。そしてボクは今風紀委員会の会議に出席していた。全開で開けられた窓からは、外の騒音がそのまま教室内に侵入し、暴れまわってる。まあ、会議といっても『挨拶運動』の当番や『身だしなみチェックの注意点』などいつもどおりの内容で特に聞く必要も無いんだけど。そして、今はそんな会議なんて耳に入ってこないで、ずっとボクは悩んでいたんだ。

そう、優しくてお人よしで、ボクの心をいつのまにか盗んでいてしまっていた、あの人のことを……

ココロの花

高校1年生の3学期の終業式の日、ボクはクラスメートの渡瀬に呼び出された。そして、予想通りに告白された。ただ、今までと違ったのは本当にボクのことをずっと見ていてくれたこと。ボクの悩みに気づいてくれたこと、本当に好きだってひしひしと伝わってくるくらいに自分の感情を表に出してくれる彼。もっと渡瀬のことが知りたくなった。

初めは、ただの好奇心。どうしてそんなに自分の気持ちに素直になれるのかが不思議で仕方なかった。ボクといえば、自分の気持ちなんて表に出さないようにずっと過ごしてきた。というよりも、自分の気持ちを表に出すことが怖かったんだ。それは、小学校のときのトラウマが原因なんだけれど。そのせいで、中学校に友達といえるような友達は出来なかった。高校は、高校こそはと気合を入れてみたものの、染み付いてしまった自分の性格をいきなり変えるなん

て土台無理な話だ。

そんな、ボクの小さな悩みに気付いてくれたのは渡瀬。こんなボクを、みんなの輪の中に連れて行こうとがんばってくれた。それは、ボクが望んだから。ボクの望みをかなえようとがんばる彼に恋をした。なにかきつかけがあつたわけじゃない。ただ、一緒にいてくれるだけで楽しかった。無表情が標準で張り付いてしまっている僕の顔には楽しいなんて表情をしていなかったかもしれないけれど、渡瀬と居る時間はボクにとってかけがえのないモノになっていたんだ。春休みは渡瀬とよく会っては表情を表に出す練習、人と話をする練習をした。たぶん、その時くらいからかな？渡瀬と居ることが楽しいと感じ始めたのは。ぶっきらぼうなボクの言葉遣いにも嫌な顔をせずにつつと付き合ってくれた。ボクを笑わせようとがんばる彼。ボクが感情を表に出せるようにずっとずっと手伝ってくれた彼。気がついたら、ボクの頭の中は渡瀬のことではいっぱいになっていた。

春休みが終わり、2年生になって同じクラスになれたこと。こんな些細なことがこんなにもうれしく感じるものなんだと実感したし、こんなにも少女漫画の登場人物みたいになっている自分に驚いた。学校生活はというと、渡瀬との訓練の成果で、最近やっと友達も出来て高校生活が楽しくなってきた。まあ、一つ難点があるとしたら、友達と話すことが増えて渡瀬としゃべるのがすこし減ってしまったことかな。

ボクの、無表情と口が悪いっていうのは、渡瀬が言うには「ずいぶん表情が柔らかくなつたしすごく良い方向に進んでいるよ」らしい。これも、渡瀬のお陰だ。ボク一人でやっても、光波ならなかったと思う。また、中学校のときのようにな人で学校生活を送っていたかもしれない。そう思うと、渡瀬には感謝しても仕切れないくらい感謝してる。まあ、それはおいといて。

今、ボクはすごく悩んでいることがある。それは、渡瀬としゃべる回数が減ってきたとか、そんなではなくて、渡瀬がずっと三浦っていう女子にかまりつきりってことだ。例えば、一緒に帰ろうとし

てもずっと三浦が居て一緒に帰れなかったり、休み時間にちよつと話したいことがあつて話しに行こうとしても三浦が居たり。邪魔とは言わないけれども、渡瀬にベタベタしててちよつとは離れてほしいと思つてしまう。そして、春休みから先月くらいまで、春休みのときに会つていたように、学校が休みの土曜日が日曜日に会つていたんだけど、それがぱたりと無くなつてしまった。それも、ちよつと三浦が渡瀬にへばりつき始めたときくらいから。渡瀬は優しいから、ボクの時のように三浦のために何かしてあげてるのかもしれない。けれど、今はそれがたまらなく嫌だった。自分でも嫌な女だと思つけど、それでもこの嫉妬心という奴は厄介で、なかなかどこかに行つてくれないどころか、嫉妬がココロを侵食してきていた。

それでも、昨日嬉しいことがあつたんだ。それは、久しぶりの渡瀬からの遊びにお誘い。家に帰つて漫画を読んだときに渡瀬からメールが来て、今度の日曜日に遊びに行かないか？つていうメール。今度の日曜日はボクの誕生日でもある。渡瀬には誕生日のことなんてしゃべつてないから、こうして誘つてくれたのも偶然なんだろうけれど、それも運命が味方してくれてるみたいですごく嬉しい。もしかしたら、今日は三浦とじゃなくてボクに話しかけてくれるかな？つて言う期待もあつただけど、全然期待はずれ。

今日も三浦とばかりしゃべつてた。昨日のメールも間違ひじゃないかなつて思ふくらい、いつもどおりに三浦とベタベタしていた。はあ、気がついたら本日何回目かわからない溜息を吐き出していた。

「どうした？葉山。さっきから溜息ばかりついているぞ？」

風紀委員長が、メガネをクイッと指で直しながら聞いてきた。今は人と話す気分じゃないんだけどな。委員長がボクの方を見て全然動かない。というか答えないと、この会議も進ませないような雰囲気だ。

「別に委員長には関係ないでしょ？溜息をついてしまったのはすみません。会議を進めてください。」

「そ、そうか。なんか怒らせてしまったみたいで悪いな。まあ、人間なんだからため息をつきたい時でもあるんだろうが、今は会議中だから気をつけてくれ」

居心地が悪いそうに黒板に向き直り、今日の会議の記録を自分できり始めた。いつもは書記にやらせている作業なのに自分でやるなんて、かなり動揺しているんだろう。

こんな言い方しか出来ないのもボクの悪い癖だ。ホントに一言多い。自分でもだめなことだって分かっているんだけど、染み付いてしまった癖って言うのもなかなか抜けてくれないみたいで、これもボクの悩みの一つになっている。まあ、それでも渡瀬のお陰でだいぶとマシにはなってきたいるんだけど。

はあ、さっきとは違う意味で心の中で大きなため息をついた。

風紀委員会も終了して今は午後5時半。

結構遅くまで会議をしていた。まあ、ボクは上の空で話なんてあまり聞いてなかったんだけど。これもいけないことだって分かっていたんだけど、委員会の仕事のことじゃなくて、ずっと渡瀬のことばかりを考えていた。ほんと、罪な男だよ。このボクをここまで悩ませるんだから。

会議の間ずっと聞こえていた吹奏楽の演奏の音楽がいつの間にか途絶えていた。もう下校時刻になっているし吹奏楽部の練習が終了していたって全然不思議じゃない。けど、誰ともすれ合わない廊下は静かでとても寂しい雰囲気だ。

カツカツカツと、ボクが歩く足音だけが響いていてこの学校にはボク以外の誰もいないみたいな気分になってくる。

早く荷物を取って家に帰ろう。動かしている足がすこしずつ速くなる。誰も居ない学校って、すこし想像しただけで結構怖くなる。実は後ろを向いたらお化けが居るんじゃないかとか、誰も居ないは

ずなのに誰かの視線を感じてしまったりとか、ホントはそんなこと無いのに、すこしの想像でそんな幻想まで抱いてしまう。というか、実際この一人ぼっちの空間っていうのを自覚してしまって、想像もしてしまつて結構怖い。ボクは、この空間から早く脱出してしまいたかった。早や歩きをしていたはずの足がいつの間にか駆け出してしまうくらいに。

会議室から自分の教室まで歩いたつて5分とかからない。けれど、走ってきたボクは1分とかからずに自分の教室に到着していた。走ってきたせいで、すこし息が荒いけどそんなの気にしていられないというか、早く外に出て誰かに会つて安心したい。勝手に自分で想像して怖がつているだけだけど、それでも怖いものは怖いんだ。ボクは教室のドアに手をかけて乱暴に開いた。

開いた向こうの景色は予想に反して、人影の姿があつた。これもある意味怖い。けど、そんな恐怖なんて気にならないくらいボクはその姿を見て動揺していた。

「よ！委員会かなり遅かつたんだな？まあ、良いや。待つてたんだよ。一緒に帰らないか？」

片手を挙げながらこちらを向いている男子が一人。傾いた日が差し込む少し赤い教室に一人ぼっちで渡瀬がイスに座つていた。ずっと考えていた人物が目の前に現れた瞬間だった。

彼の周りには誰もいない。いつたい、いつから教室にいたんだろう？ずっと一人で待つているなんてボクには無理だ。だけど、渡瀬はやさしいから、人から頼まれたものは嫌な顔をしながらもしつかりとやつてくれるし、期待にちゃんと答えてくれる。そう、彼はやさしい。誰にでも…

けど、ボクは今日待つていてとか頼んでないのになんでだろう？「なにしてんの？一人で放置プレイごっこ？変態さんだね。それより、三浦は？いつもべつたりなのに珍しい」

ほんととは待つててくれてうれしいとか言いたい。けど言えない。それに、渡瀬のせいでボクはずっとずっと悩んでいるのに、なんだ

か目の前でへらへらと笑っているのが気に入らない。なんだか意地悪をしてしまいたい気分になっていた。

「いやいや、そんな変体さんなんてこと絶対に無いからな！三浦なだけでさ、なんか俺と一緒にずっと待ってたんだけど、用事があるみたいでちょうど30分前に帰ったよ。っていうか、委員会って結構遅くまでやってるもんなんだな？女の子一人で帰すにはちよつと遅すぎな気がするんだけど。あと、葉山の俺に対する言葉遣いつてだんだんひどくなってるないか？」

ボクの言葉遣いに怒っている渡瀬だけれど、そんな態度は眼に入らなかった。『三浦が帰った』ということを知っていて、心の中でほつとする。ほんと三浦はずつと渡瀬にべつたりで、そのせいでなかなか渡瀬に近づけない。話したいのに話せないという状況を作ってしまったている張本人だ。三浦としてはそんな悪気は無いんだろうけど…そしてなにより、渡瀬がボクを心配して待っていてくれたという事実がとても嬉しかった。

「ふゝん。まあ、ボクは三浦さんに居ようが居まいが関係ないけれどね。渡瀬がどうしても一緒に帰ってほしいって言うなら一緒に帰ってあげても良いけど？」

ボクのそんな可愛げの無い言葉を聞いて、何を思ったのか渡瀬はニツと笑った。その『素直に言えば良いのに』っていう笑顔にちよつとムツとしたけど、きちんと気持ちが通じたみたいで安心した。

ほかの友達とかには徐々にはあるんだけど、素直に言葉を言えるようになってきてると思う。けど、渡瀬に関しては1年の3学期の終業式から何も変わってないと思う。むしろ、自分の気持ちを自覚してからは悪化してしまってる気がする。まあ、渡瀬は気にしないようだけどボクはちゃんと直したいと思ってる…直ってないけど。

「はいはい、それでいいから帰ろ」

座っていたイスから立ち上がり、ボクのカバンを持ってこつちに歩いてきた。ほい、とボクのカバンを差し出した手には、頬杖をつ

いていた跡がくつきりと残っていた。

渡瀬はこの教室で一人なにを考えながらボクを待っていたんだろう？というよりも、どうしてボクを待っていたんだろう？いつもなら、部活をしてない渡瀬はホームルームが終わったらすぐに変えるはずなのに。やっぱり三浦と話をしていたのかな？そう思うと、心の奥で醜い塊がじわじわと広がってくるのを感じる。けれど、それ以上に嬉しい気持ちが勝っていた。どんな理由で待っていてくれたって関係ない。待っていてくれたって言う事実は変わらないんだから。

『いつたい何時間待っていたの？』『ほんとに君は優しいね。』
いろいろとかけた言葉が浮かんでくるものの、それを口に出すことは無かった。搾り出せた言葉は一つだけ。

「…ありがとう。」

「俺が待ちたいから待ってただけだから、葉山は気にすること無いって。」

渡瀬は、ボクにカバンを渡すとスタスタと、先に歩いて行ってしまった。その後姿は、大きくて、やさしくて、ボクには届かないくらい遠くに感じた。

これが、ボクと渡瀬の距離。近いようで、本当は全然近くない。けれど、全く届かないほど遠くない。この距離が今のボクにはもどかしい。すぐにでも手が届くような距離にボクは居たい。すぐにも、渡瀬に触れられる距離にボクは居たい。

少しでも近づきたくて、すこし駆け足で渡瀬を追いかけた。

梅雨が終わり本格的に夏に変わっていきこうとしている今日この頃、太陽が沈むのが少しづつ遅くなってきて昼間の時間が延び始めている。ま、そうはいつでも今日はすでに太陽がだいぶと傾いていて僕の目の前に広がる風景は全て赤い色に染まっている。

ボクは今、渡瀬と一緒に下校中だ。約束したわけではないけど、渡瀬が待っていてくれたからこうして帰れる。だけれども、なぜか会話が無い。

色々と話したいことがあるのに、どうしてか口からその言葉が出て行かない。っていうか、渡瀬とこうして二人きりになるのも久しぶりだ。だから、変に意識してしまってボクから話しかけることが出来なくなってしまった。けど、渡瀬から話しかけてくることも無い。こうなってしまうと、ボクと居るのが楽しくないのかと不安になってしまう。おそろおそろ渡瀬の顔を見るけど、ずっと何かに悩んでる様子だ。というか、待っていたくせに自分の世界に浸ってしまっている渡瀬に少しイライラしていたりする。

「なに悩んでるの？その小さい頭で答えが出る問題なんてないだろうから時間の無駄だよ？なんだったら、ボクが相談に乗ってあげようか？」

「ヒド！なにそんな言い方しなくてもいいじゃん！」

「ボクをほったらかしにした罰だよ。」

ぷいっとそっぽを向いているボク。その横で、なにやらニヤニヤしている渡瀬。全く、ボクと居るときのこいつはニヤニヤすることが多い。こっちとしては釈然としない気分だ。

「何よ？ニヤニヤして…変体面してるわよ？」

「別にニヤニヤしてるつもりもないし、変体面は元からだ！……自分で変体面って言ってチョットへこんだし…。まあ、俺のことは置いといて、葉山が少しずつだけど、本音を零してくれる様になったのがさ、うれしくてな。」

はて？ボクは本音なんて零したのだろうか？渡瀬はと言うと、わからないのか？と言いたそうな顔をしている。

「ボクは渡瀬がニヤニヤするような事言っていないよ？」

「だから、ニヤニヤしてないっての！…葉山は俺が一人で考え事ばかりだから、ほったらかしにされて寂しかったんだろ？」

いわれて気がついた。『ほったらかしにした罰だよ』たしかに、

ボクが言った言葉だ。…たしかに、ほったらかしで寂しかった。自分でもびっくりするくらい素直に言ってしまったている。顔の温度が上昇するのが自分でもわかるくらいにカツと上がった。

「葉山、顔真っ赤！」

笑い声を抑えようとししないで、大きな声で笑う渡瀬。

「夕日だよ！夕日の赤が顔に映ってるだけ！！っていうか、見るな！！」

いつもの無表情を保つことが出来ずに、叫んでしまった。

まったく、渡瀬を相手にすると自分のリズムが崩されてしまう。

たぶん、これは良い事なんだろうな。無意識に自分の気持ちを相手に伝えることが出来るようになってきているって言う事実がとても嬉しかった。

カバンを振り回しながら追いかけるボクから逃げるように前を歩く渡瀬。

こういう風に渡瀬とじゃれあうのも久しぶりだ。最近は何かにつけて三浦が渡瀬にべったりくっついてるし、下校も三浦と帰ってるみたいだし。休み時間も渡瀬と三浦はべったり。まあ、見てる限り、三浦から渡瀬にくっついて行ってるみたいだ。

三浦が現れる前は毎週のように、土曜日か日曜日はふたりで買い物とかにも行っていたんだけど、渡瀬が三浦とべったりくっつきだしてから全然なくなってしまった。本人に聞いたら付き合ってるわけじゃないって言っているんだけど、第三者目線で見るとれっきとしたカップルに見える。

三浦と土日に会ってるんだと思うと、胸が苦しくなる。どんどん自分が嫉妬に飲み込まれていっているのがすごく嫌だ。

自分はこんなにも嫉妬深かったのかと思うようにもなってしまう。はあ、心の中で溜息を吐き出す。渡瀬は優しいから、委員会で遅くなったボクを心配して一緒に帰ってくれてるんだと思う。けれど、そんなやさしさもボクだけに向けられているものじゃない。もし、今日のボクの立場に三浦が立っていたとしても渡瀬は同じこ

とをしていたんだろうと思うと、今の嬉しい気持ちも小さくしぼんでしまう。今この瞬間は、渡瀬を独り占めできたとしても、又明日から三浦とベタベタするのかと思うと、うれしい気持ちが大きいほど落胆もひどくなる。

悲しくなるくらいならはじめから優しさなんてボクが拒絶すれば良いんだけど、ボクはそんなに強い人間じゃないからこの小さい誘惑もうち負かすことはできずにこうして、甘んじて受けてしまってるわけだけど。

ひとり、うれしくなったり、悲しくなったりをしていたら渡瀬が振り向いて話しかけてきた。

「葉山に聞きたいんだけど、カレーライスってあるじゃん？あれって、ご飯にカレーが乗ってるからカレーライスになってるわけだろ？っていうことは、カレーにご飯をかけたらライスカレーになるのかな？」

こいつは、いきなりこんな話題を振ってくる。こういうのも久しぶりだ。

けれど、

「くだらなさすぎる。」

率直な感想。

「はあ？そんな答え聞きたいんじゃないで、カレーライス、ライスカレーどっちなんだよ？これを聞かなきゃ俺気になって夜も眠れねえよ！」

「どうせ、かき混ぜて食べるんでしょ？じゃあ、どっちでもいいじゃん。っていうか、あんたの頭の中身もぐちゃぐちゃにかき混ぜたらちよつとはマシになって、こんなくだらない質問してこなくなるんじゃない？」

ガーン、そういうとあからさまに落ち込み始める渡瀬。

ほんと、人が真剣に悩んでるって言うのに、そんなこと聞いてこないでよ。なんだか、三浦が現れる前に戻ったみたいで嬉しくなるじゃん。どうせ、また月曜日から三浦とベタベタしてるくせに。そ

う思うと、もつと意地悪な気持ちになってきた。

「じゃあ聞くけど、ハヤシライスのハヤシって、ハヤシさんが作ったからハヤシライスって言われてるみたいなんだけれど、じゃあ、カレーライスはカレーさんが作ったからカレーライスなの？あともう一つ。ありえないけど、もし、焼肉にカレーをかけたらカレー焼肉になってしまうの？むしろ、カレーに焼肉をかけたら焼肉カレー？」

「え？作った人名前？かける順番？かけるもの？……」

渡瀬は念仏のように同じ言葉を繰り返して呟き始めて、最終的には頭から煙を上げながら機能を停止してしまった。…数秒後には復活してたけど。

「葉山、あんましややこしいこと言わないでくれよ。頭こんがらがっちゃったよ。」

「じゃあ、くだらないこと考えないの。どっちにしろ、おいしく食べれたらオツケーじゃん。」

「まあ確かに。けど、名前って結構大切だと思うけどなあ」

「名前の前後を入れ替えたくらいでそんな大げさな…まあ、ドライカレーとカレードライじゃ全然イメージが変わってくるけどね。」

「だろー！だから、大切なんだってば。」

こんなくだらない会話でどうしてこんなに楽しいんだろ？渡瀬もすごく楽しそうに見える。ボクのおかしいだけかもしれないけど、三浦と居るときよりも楽しそう。こんな会話は渡瀬とじゃないと楽しくないんだろ？な…

渡瀬とだから楽しい。そう実感してる自分。こういうことを自覚してる時点で、ボクは渡瀬にさうとう参ってしまったてるんだろ？ね。そんなくだらない会話をしていたら、急に少し真剣な声で渡瀬はしゃべりだした。今までの会話なんて、関係なしに全く違う話を…「あのさ、昨日脳メールして約束した日曜日なんだけど、用事が出来て葉山と遊べなくなっただ…ごめんな。」

グサリと、胸に何かが刺さる音がした。体が急に油をさしてない

機械みたいにギシギシと音を立てて動けなくなる。イッタイナニヲイワレタンドロウ？頭の中では理解しているのに、心が拒んでいる。だけど、ボクの口は自分の意思とは関係なく動いていた。

「最近、三浦とつるみだしてから、全然出かけて無いじゃん。だから、今更だよ。別に渡瀬と出かけるのが楽しくて出かけていたわけじゃないじゃん。ボクの『無表情』とか『口の悪さ』を直すために手伝ってくれてたわけでしょ？それに最近そのリハビリも無いってことは、渡瀬が見る限りだいぶよくなってことじゃないの？だから無理にボクを誘って遊びに行かなくても良いんじゃない？」

もう、何も考えられ無かった。ただ、自分の言葉なのに、第三者として聞いているような不思議な感覚。もう心が動いていないんだ。だから、何も感じない。多分、いま心が動き出したら壊れてしまう。「前に比べたらだいぶよくなったよ。けど、まだまだだとは思うんだ。ここ最近色々あって、遊びにいけないけど、久しぶりに葉山と出かけたと思って思ったんだけどさ。用事が入っちゃって、ほんと俺もかなりガクってきてるんだけど」

「だから別に良いって…今日はここで良い。送ってくれてありがと。ばいばい」

渡瀬はまだ何かを言いたそうだった。けれど、それを聞くような余裕は今の僕には無い。

もう限界だった。もうこの場所に居たくなかった。早く渡瀬と離れたかった。もう家も眼と鼻の先立ったし。ここまできたら送ってもらおう意味もない。

ほとんど走ってしまっていたと思う。渡瀬の横を抜けると一目散に自分の家に向かって走っていった。

どうやって、鍵を開けて家に入ったのかすら覚えてない。気がついたら自分の部屋のベッドの上でうずくまって泣いていた。

会えると思っていたのにそれを裏切られてしまった。期待をしてい多分落胆が物凄く大きい。久しぶりに会えるって言うのんでボクが舞い上がりすぎたんだ。

『今度はいつ会えるの?』って聞きたい。『ほんとはずっと一緒にいたいよ』って言いたい。だけど、ボクにはそれを言う資格がない。だって、『カノジヨ』じゃないんだから。

ボクは、彼のトクベツになりたかった。

春休みに入る日に、ボクは渡瀬に告白された。

別に、告白されたから好きになっただって訳じゃない。休みの日にふたりで遊びに行ったりとか、渡瀬の家に花を買いに行ったりして、るうちに気がついたら好きになっていた。何をするにも渡瀬のことを考えてしまう。はじめは何かの病気かと思っただくらい。

渡瀬のお陰で少しだけマシになった言葉遣いと態度で、2年生になつてやっと友達と呼べる人も出来たし、学校生活も楽しいと感じれるようになってきていた。渡瀬のお陰でボクの生活は確実に良い方向に向かっていったんだ。

2年生になった5月くらいからかな、渡瀬の周りに三浦が付きまとい始めたのは…始めは恋愛相談みたいなことで渡瀬に話しかけていたのを記憶してる。それでも、休みになつたら二人で出かけたりするのは続いていた。渡瀬とならどこへいっても、なにをしても退屈なんて感じなかったし、心の全てが満たされていて充実していた。

それが、6月に入ってからとはばったりと無くなってしまった。ボクから誘ったりとかは全然してなかったんだけど、いつもなら休み時間に『次は何処へ行きたい?』とか話しかけてくるはずなんだけど、ボクのほうへは来ないで三浦とずっと話していた。

最近の様子を見ると、渡瀬はばくに愛想をつかして三浦のことが好きになつたんだと思う。だって、休み時間もずっとしゃべっているし、二人で帰っているのよく見かける。たぶん、休みの日に出かけなくなつたのは三浦とあつてるからだと思う。

渡瀬がボクをずっと好きで居てくれる保障なんてないのに、何にボクは安心してたんだろう…

自分の甘さが悔しい。

いつまでも想ってくれているなんて思っていた自分が、今の関係で満足していた自分が腹立たしい。

こんな後悔するくらいならば、もっと早く自分の気持ちを伝えるべきだった。

トントン

突然部屋に、ドアをノックする音が響いた。

「麗？ご飯だからおりておいで」

お母さんが話しかけてきていた。

「…いない。」

たぶん、涙声だったと思う。だけど、お母さんは特に気にした様子も無くこう続けた。

「じゃあ、食べたくなったら降りておいでね。」

気を使って何も無かったことにくれるお母さんの気遣いが痛いくらいに胸にしみた。

お母さんに声をかけられて気がついたんだけど、外はもう真っ暗になっていた。

いったい何時間一人で泣いてたんだろ？

ボクは、ずっ〜と渡瀬のことを考えて泣いてたんだ。自分でもびっくりなくらい想ってしまってる。

そこまで人を好きになれた自分が少しうれしい。

ボクは、渡瀬に出会えて本当に良かったと思う。彼が居なかったら、多分今も一人ぼっちだ。彼が居たらから、ボクは友達を作ることができた。彼が居たからボクは変わることが出来たんだから。

『好き』って言う気持ちと、『ありがとう』って言う言葉を伝えたい。

もう、ボクのことを好きじゃないとしても、ボクの気持ちを聞い

てほしい。

もう、ボクの事見てくれないとしても、ボクの気持ちを分かっ
てほしい。

たとえば、ボクの気持ちに渡瀬がこたえてくれなくてもこの気持ち
を伝えよう。そうしないと、ボクは前に進めないから。

前編（後書き）

読んでいただいております。ご意見、ご感想などがあればよろしくお願いします。わたしが喜びます。

中編

太陽は今日も自己主張が激しいみたいで、見事に晴れた土曜日。

ノースリーブにバミューダパンツ、頭にはすこし大きな男物の帽子。きつちりと、日焼け止めを肌に塗ったんだけど、全然太陽から肌を守ることは出来ないみたいで、じりじりと肌を焼いていた。はあ、袖の無い服なんて着るんじゃないかった。

それに、太陽だって少しくらい曇っていてくれてもいいと思う。ほら、その中学生も言ってるじゃない「もうすこしくらい太陽はサボってくれたほうが良いのにな」って……まあ、実際にサボられたら地球が滅んじゃうんだろうけど。

さて、どうしてボクがここにいるかというと、それは明日の渡瀬との対決の準備の為だ。昨日、散々悩んだ末に出した結論。それは、渡瀬にこの胸のうちの思いを思いっきり打ち明けてけじめをつけるってこと。明日、ボクの誕生日に渡瀬に告白する。けど、今持っている服は全部一度は渡瀬の前で着てるから、今日新しい服を買って、新しい服で勝負を挑むつもりだ。

どれだけ勝率が低くても、少しでも勝率が上がるならそれを実践する。断られるって分かっていても、断られたくないって思うし、渡瀬の隣はボクがずっと独占していたい。その為なら、ボクはなんだってする。それくらい、もう渡瀬でいっぱいだってことに昨日気がついていたんだ。

それに、明日の勝負服を選んでもらう為に日は助っ人を呼んでくれるんだ。渡瀬のお陰で友達になれた人、田原真紀。

最近では真紀って呼び捨てに出来るくらい仲が良くなった。ボクの毒舌も全然気にしないみたいですごく付き合やすい子。たぶん、女友達の仲で一番の友達。

約束した時間は12時丁度に駅前の噴水。

現在の時間は12時を少し回ったところ、そろそろ来るとは思う

んだけどじつと待つてるなんて退屈すぎる。それに、暑苦しいくらい輝いている太陽がボクの体力を徐々に削ってる。噴水なんて日のあたる場所を待ち合わせ場所にするんじゃないかった。そんな後悔が頭をよぎる。けれど、この駅前には噴水以外に目印になりそうな場所なんてほかに無かったから仕方が無い。

待ち合わせにしていた噴水の前のベンチに腰を降ろして駅のほうを眺めていると、携帯を片手に持ったサラリーマンが忙しそうに早歩きをしていた。

そんなに急がなくても良いんじゃない？って思ってしまうほどの速さに少し興味深く見つめているボク。この暑い中、多分取引先に向かう途中なのだろうサラリーマンに軽く同情していた。

「こんなに暑いのにがんばってるんだ……けど、暑苦しい」

けど、口からこぼれた言葉には一言無駄なことが入ってくる。こんな自分の口が嫌いだ。

「こら、そんな事言わないの！あのおっさんもがんばって働いてるんだから！たえ暑苦しいと思っけていても、言ってはいけないう？」

不意に後ろから声が聞こえた。

腰に手を当てて二力つと笑っている真紀がいた。

「人に説教する前に、真紀遅刻してるよ？」

全然悪びれた様子もなく、舌を出して笑っている真紀。

「まあ、いいじゃん。ちよつとくらい。それよりさ、ご飯食べに行こうよ！走ってきたからおなかペコペコだよ」

自分に都合の悪い話題をどこか遠くへ放り投げて、自分の欲求に忠実に行動する。

自分の感情をストレートに表現する真紀は裏も表も無い、そんな真紀がすこしだけうらやましかったりする。

ボクの正反対の性格だ。

「ほら！ぼうつとしてないで行くよ？こんな暑い中、陽が当たるところなんて居たくないしね」

「……その陽の当たるところですつと待たされてたボクはどうなのよ？」

「細かいことは気にしない！そうだねえ、涼しくなるもの食べに行こ！」

ボクの右手を取って歩き出した。ふいに振り返ってボクの顔を見て「ほら、そんなにふてくされてないでさ、遅れたことは謝るからその仏頂面やめなよ」

「別にふてくされてないから、もともとこの顔なの。仏頂面でわるかったわね！」

「わかつてるよ。言ってみただけだから、気にしないで。前だったら怒らないで無表情だったのにね。人は変われば変わるもんだね」屈託の無い笑顔で笑ってる真紀を見ると、怒るのも馬鹿らしくなってきた。それに、その笑顔を見てるとこっちまでつられて笑ってしまう。

「人のことからかかってないで、さっさとお昼食べようよ。ボクもおなかすいてるし」

ボクは真紀に引かれている手を払って、真紀の横に移動した。やっぱり、友達と肩を並べて歩くのってすごくうれしい気持ちだ。今まで、友達なんて居なかったからすごく新鮮だし楽しい。

「じゃ、ざるそばでも食べに行きますか！」

「賛成」

ボクは右手を上げて返事をしてあげた。

その様子を見た真紀は又笑い出した。

ボクもつられて笑えてくる。

真紀といたら笑がたえないな。もしかしたら、渡瀬はこういう子の方が好きなのかもって考えてしまう。

渡瀬と真紀が一緒にいるところはたまに見かけるしね。

まあ、今は考えても仕方ないし、とりあえずお蕎麦屋さんを探しますかね。

ここは、某うどん屋さんのチェーン店。

トレーを手にレジまでに並んでいる揚げ物やお刺身などのおかずを取っていった、最後にレジにて支払いを済ますシステムのお店。だから席を取るのが一番最後になるんだけど、もし満席だったらどうするんだろ？そんな疑問が頭の中を駆け巡ったんだけど、特に心配する必要も無かったみたいだ。

先に会計を済ました真紀が窓際の席から手を振って待っていた。

「おい、こっちこっち！」

「そんな大きな声を出さなくてもわかるから、かなり見られてるよ？こっちが恥ずかしいよ」

何気に、店の中の注目を集めてしまっていた。

だって、手を振ってるだけでも目立つのに、その上大声で呼ぶんだよ？当たり前が目立つよね。

ボクは早足でテーブルまで行って、真紀の向かいに腰を下ろした。

「まあ、細かいことはいいじゃん。さ、食べよ」

そう言って真紀は割り箸を割って食べ始めた。

「真紀、うどん屋さんなのにざるそばって……」

「まあ、気にしない気にしない。なに食べようが、客の自由でしょ？おいてあるんだから別にいいんだよ。ほら、レイも食べないとざるうどん私が食べちゃうよ？」

にこっと笑いながらジョーダンジョーダンって言ってる真紀だけど、今の一瞬は目がマジだった。早く食べないとホントに食べられてしまう気がする。ボクも割り箸を割って食べ始めた。

「でさ、今日はこういう用件なわけ？レイが私を遊びに誘うって珍しいしね」

ずずーっとそばをすすりながら真紀が尋ねてくる。いったいどういう風に言ったらいんだろ？明日告白するからその時用の服を選んでほしいって言うの？それじゃあ、告白するのバレバレじゃん。

別に、告白すること自体はばれても全然問題は無い。けど、真紀の性格を考えると絶対にその現場で生で見たがるからあんまり言いたくないんだけど。

「ん、そんな無表情で悩まないでよ。ていうか、私に用があるのにその用を言わないっておかしくない？」

真紀はジト目でこっちを見てくる。……そばをすすりながら。

「まあ、言いたくないなら言わなくても良いんだけどね。私も暇だったし、たまにはレイと遊びに行きたいし。それにさ、私呼び出した用って渡瀬君がらみでしょ？」

真紀の『渡瀬』という言葉にココロが暴れる。いきなりの不意打ちで、ココロが揺れる。けれど、ここで動揺してしまったら真紀の思う壺だ。ここは落ち着かないと。

「そ、そんなわけないじゃん！なに言ってるのよ」

動揺が心の中から抜け出して、言葉に乗り込み真紀に向かって発信してしまった。ほんと、こういうときにいつものも無表情、無感動が出ればいいのに、こういうときに限って感情が表に出てしまう。

プツと噴出す真紀。笑いをこらえるように下を向いてしまった。

けれど、真紀はどうして渡瀬がらみで呼び出されたって言うのがわかったんだろう？そんなこと、昨日誘うときも今日会ってから一言も言っていないのに。それどころか、昨日の連絡から今まで渡瀬の名前は一度も出していない。もしかして、真紀は超能力者なのかもと真剣に考えてしまった。

真紀を見ると、もう笑うのをこらえるのをやめて普通に笑っていた。

「カマかけてみたんだけど、あっさり引つかかるなんてね。いつものレイじゃ考えられないよ。いつもはクールにスルーするか受け流すかするのに、渡瀬君がらみになると人が変わったかのように素直になるんだから。カワイイね」

最後の言葉は、とりあえずおいておこう。真紀はたまに意味不明なこと言うから。

「別に、クールとかそんなつもりもないし、渡瀬がらみだからってべつに素直になったりしてないよ？ていうか、カマかけたのね……」
「ごめんごめん、冗談のつもりだったのに図星とかホントに偶然だからね」

目に涙をためて笑う真紀を見ると、怒る気力もなくなってくる。これもある意味真紀の魅力だ。

「それで、渡瀬君がらみで私に用事ってなあに？」

真紀はすごいニヤニヤしながらこっちに迫ってきた。ものすごい威圧感だ。

なんか手もワキワキと動かしながら体ごと迫ってきて近づいてきているっていう錯覚までおこ……ってほんとに体ごと迫ってるし！
「テーブルに体を乗り出さないの！もう、高校生なんだから少しは考えなさいよ」

「あれ〜？もつと取り乱すと思ったのに全然クールねえ。やつぱり渡瀬君がらみじゃなきゃ取り乱さないか……ふむふむメモメモ」

ぱぱっと自分の席にもどるとカバンから手帳を取り出し、本当にメモを取り始めた。

「で、用事を早く言いなよ」

メモをいつでも取れる体勢をとって、ボクに催促してくる。
なんだかすごく言いたくなってきた。目がキラキラしてる真紀がすごくム力つく。ボクは真紀のおもちゃなんかじゃないし。

「やつぱり言うの辞めた。今の真紀見てたら、どう転んでも真紀がおもしろがるだけだもん。それでもボクは真面目に悩んでるんだから、そういう風にされると嫌だ」

「ぐはあ〜、なんか今グサツときたよ？ひどくな〜い？」
わざとらしく涙を貯めてこっちを見てくる。

そんな顔されると、ボクが悪い子とした見たいじゃん……
ん？なんだろ？右手に目薬があるような……

「…真紀？なにその目薬」

「あれ？もうバレちったか？いやあ〜冗談だよ冗談」

「なんか罪悪感感じた自分が馬鹿みたい。真紀なんて馬にでも踏まれたらいいよ」

舌を出しながらおどける真紀。

さつきとは違って今回はちよつとムツと来た。ちよつとやそつとじゃ許してなんてあげないんだから。

「ほら、ちよつとざるそばあげるから機嫌直してよ」

もうそんなものなんかで釣られるボクじゃ……

「レイちゃん、ほつぺたが緩んじやつてるよ」

「緩んでない！」

「嘘だね。もう、ツンデレだねえ」。怒ってる振りも大概にしないと、渡瀬君にも勘違いされるよ？」

「え？」

「だ〜から〜、ちゃんと態度で示さない人には伝わらないよつて言ってるの」

いつの間にか真紀はまじめな眼差しでボクを見ていた。

その瞳は真剣そのもので、ボクの心なんて全て見透かしてしまいそう。

「ほら、言ってみ」

ふいに、表情をやわらかくしてボクに話を促してくる。

どうしてだろ、なんでこんなにボクの心にするりと入ってくるんだろう。

どうして、こんなに、こんなに優しいんだろ？

今聞かれていることは昨日のことじゃないのに、昨日のことを思い出してしまう。

昨日たくさん泣いたのに、また、涙が出そうになる。

そんな顔を見られたくなくて俯いてしまった。今しゃべるといらないことまで言ってしまうそう。

自分の意思とは関係なしに暴れる心を押さえつけないと、また泣いちゃいそう。

「まあ、今は無理にとは言わないけど、この食事が終わるまでには

今日の用事教えてね」

そういつて、ボクの頭を優しくなでてくれた。

こんなちいさなことが、今のボクにとっては涙腺というダムを決壊させる爆弾。決壊したダムのように目からは涙がとめようも無く流れてくる。

真紀はボクが落ち着くまで、頭をなで続けてくれた。

「まったく、君はかわいいね」

そういいながら、なで続けてくれたんだ。

「なるほどねえ、自分の誕生日に告白すると。あわよくば、渡瀬君が自分への誕生日プレゼントってこと？」

「そんなんじゃないってば！一つの区切りってことで、自分で納得したいだけ。」

少し前にやっと泣きやんだボクは、真紀につれられて喫茶店へ来ていた。

さすがにうどん屋さんでするような話ではなくなってきたし、周りから注目されるようなアクションも起こしてしまったわけだから懸命な判断だとは思う。

けど、喫茶店に移動してからずっと真紀からの質問攻めはどうかと思う。で、とうとうしゃべってしまったし。

「ふーん、まあ聞いてしまった手前、ちゃんと服選びに付き合うから安心しなよ」

ぱちつとウインクまでくれてしまう始末。

「やる気満々なのはうれしいけど、ちよっとうざい」

「またまた、内心うれしくせに素直じゃないんだから」

ボクの言葉遣いにも動じなくて、真意を読み取ってくれるのはかなりうれしいんだけど、うざいのはちよっとほんとだったり……

ちよっとうざいくらいで接してくれないとそっけなくするから、

すぐ人がボクの周りからいなくなっちゃうんだけどね…

「まあ、今日は服選びを手伝ってもらうのと、グチを聞いてもらおうともっただけ」

「そっかそっか、私はレイに愚痴を言ってもらえるくらい信用されてるって事か、なんか照れるね」

はにかむように笑う真紀は、同姓のボクがみてもかなり魅かれるような魅力がある。

こんな笑顔を見せられたら男子はひとたまりも無いんだろうな。

「まあ、信頼してないってことは無いよ。真紀だしね」

とにかく、勝負は明日なんだ。今日はその準備をしなくちゃね。

明日どんな結果になっても、後悔が無いようにがんばらないと真紀に申し訳ないし。

「なんか含みのある言い方だなあ、まいいや。とりあえず、服買いにいこっか」

そういうと真紀は立ち上がり、会計をするためにレジへ。

ボクもそれに習って、レジへ向かった。

「今日は、私のおごりね。かわいいレイ見せてもらったから、それで充分おなかいっぱいだよ」

「なっ、なんでそうなるの!？」

真紀は笑って何も言わなかった。

真紀なりに応援してくれてるってことにしておこう。そうしないと、ボクが精神が持たないかも。

ボクと真紀が向かったのは近くのデパート。

それからの真紀はすごかった。

ボクの体力が尽きるまで、服屋という服屋を見て回り、その服屋にある服でボクのサイズに合う服は全てボクに当てて似合うか見ていた。

見た服の数は多分3桁に達しているかもしれない。けど、それはボクの体力が尽きたからであって、真紀いわく『このデパートにあ

る服で一番似合うものを買おうね』って最初に言ってたから、ホントに全部の服を見ようとしたかもしれない。

数ある服の中から選ばれたのは、うすい水色のワンピース。

そして、今はデパートの中にあるフードコートで一休み中だ。

「あのさ、ボクはカッコいい感じの服がほしかったんだけど」

真紀は飲んでいたオレンジジュースから口を離した。

「いやいや、何を言ってるの？レイにはこういった服のほうが似合うのよ。普段のイメージとは全く違って、なんていうか清楚みたいで、だけど可憐なレイ。試着したときに『これだ！』って思ったね」

そう、ボクはカッコいい服がほしかったんだ。

それも男の子よりもかつこよくなれるような服。どんなことがあっても、強気で居られるような服が。

だけど、買ったのはワンピース。それも飛びつきり可愛いものだ。

「だけどさ、やっぱりボクの好みってあるじゃん」

ボクの抗議をもるともせずに、にっこりと笑う真紀。

「これを着れば、渡瀬君なんていちころよ！それに、ほかの男子どもも選びたい放題！もしかしたら向こうからよってくるかも！」

きゃーっとはっぺたに両手を添えてくねくねする真紀。

正直、ちよつときもちわるいです。

「ボクはさ、付き合うつていうのは両方が好き同士じゃないと嫌なんだよね。だけど、入学当初からうざったいくらい言い寄られて迷惑してるのよ。それに今は、渡瀬以外とは付き合う気なんてさらさら無いのにな」

頬杖をついて、自分のグレープジュースを飲む。

ふと真紀からの視線に気がついてそっちを見てみたら、真紀がニターっと笑っていた。

「なにわらってるの？」

真紀はふふふっと含みのある笑いを見せながら口を開いた。

「いやいや、レイちゃん天然さんなんだねえ」

いまだに、ニタニタしている真紀。

いったいさっきの会話の中で、何処にそんなにニタニタとわらえるようなところがあるんだろう？

「いやいや、意味わかんないし」

「ふうん、いや、ほんとに気がついてないし」

いつそうニタニタした顔を辞めない真紀。ちよつとイライラしてきた。

「だから、どこがなのよ？」

「全く、レイは自分の発言に自覚あるの？さっきね『渡瀬以外とは付き合わない』って言ったのよ。それってさ、『私は渡瀬君が好きです』って言うてるようなもんじゃない。まったくのろけちゃって
」

いや、んとさっきと同じようにクネクネする真紀。

そんな真紀を見てる余裕は今のボクには無かった。

しまった！っという、言葉がぐるぐると頭の中で回り続けていたから。たしかに、渡瀬のことは好きだ。けれど、他の人からその事実を指摘されるのはかなり恥ずかしい。

「うわ、レイちゃん真っ赤だよ。いやあ、今日は良いものが見れる日みたいですね」

自分でも真っ赤なのは分かってる。けど、全然体が言うことを利かなくて顔の色が戻せない。いつもならこれくらいポーカーフェイスで誤魔化せるのに。

こういつ風に自分の感情がストレートに表情に出るようになったのも、渡瀬のお陰かもしれないけど、こういつときは前のままでよかった気がする。

こんなの、自分のキャラじゃないし、恥ずかしいし。ほんとに、顔から火が出るようだ。

「もういいじゃん！そんなの！そろそろ出よ！ジュースも飲み終わっ
たし！」

ずずーっと残りのジュースを飲み込んで、ボクはここから立ち去

る理由を造っていた。

「あははあ、飲み終わる前に飲み終わったって言われても、全然説得力ないよ。あ、涙出てきた。今日のレイってば最高だね」

涙を流しながら笑う真紀を見て思う。今日真紀に頼んだのは間違いだっただのではないかと。

デパートから朝真紀と待ち合わせした駅に帰ってきたら、もう周りは赤く染まっていた。

太陽が傾いて大きく見える。昼間は、溢れ返るほど人がいたのに今はぼつりぼつりとしか人がいない。

「あ、つ、たのしかった！」

「ボクは疲れた」

ボクは対照的なテンションの真紀がちよつと疲れる。

ボクの右手には服が入った袋がぶら下がっていた。

真紀が選んでくれた勝負服。これで明日の大勝負に勝つ予定。っていうか、勝つとか負けるとかじゃない気がするんだけど、真紀が『絶対勝ちなさいよ！』とか言っていてちよつとついていけなかった。まあ、勝ち負けって言うか自分のけじめなんだしね。負けるとしたら、自分に負けるとかかな？

ちらりと左手にぶら下がってる大きな紙袋を見て、大きな溜息が出してしまう。

「いやあ、レイもいっぱい買ったねえ」

「こんなに買うつもりじゃなかったのに……」

「欲しいと思ったら買わなきゃ損だよ！」

「そう言ってそそのかしてくるから、こうなっちゃんだよ！」

真紀がずつとこんな調子だから、ついつい予算を大きくオーバーしてしまっただ。

ちよつと良いなっと思った服を手当たり次第に買い物籠に放り込

まれて、気がついたら服の山が出来てしまっていた。

それでもその服の山から、さらに好みのものだけに絞ったんだけど、それでも5、6着はあると思う。

はあ、次のお小遣いの日までまだまだあるからちよつとの間は、節約生活しないと……

「まあまあ、自分へのプレゼントだと思ったら良いんじゃないの？ そのつもりで今日、私を誘って服を買いにいったんでしょ？」

「いやいや、違うから。渡瀬に告るときの服だけを見てもらおうと思つてたのに」

「ふうん、そんなこと言っちゃうんだ？ 結構ノリノリで服選んでたくせに」

「えっ？ そ、そんなことないよ」

「動揺がモロに表情に出てるんだけど。まあ、可愛いからいいか…… あっ！ そうだ！」

何かひらめいた！ そんな感じでこつちを向く真紀。
そのひらめきがかなり怖い。変な言い出しそうでかなり怖いんですけど。

「よし！ 帰ろう！」

真紀が何かを口にする前に、さつさと帰つてしまえばいいんだ。すこしだけ、良心が傷むけど……

ふと、横を歩いていた真紀がいなくなった。

後ろを振り向くと真紀がうつむいて立ち止まっていた。

「うわあ、レイがいじめる」

こ、これは、マジ泣きだ！

大粒の涙を滝のように流しながら泣きじゃくっていた。

「え？ え？ 今のボクが悪いの？」

「まだもうちよつとあそぼよ」

幼稚園児のような理由で泣くなよ。

心の中で盛大に突っ込みを入れてみるものの、それを実際に真紀には伝えられなかった。

さすがに、この状況でそんな冷たい言葉を言ってしまったらもと泣きじゃくってしまうのが、目に見えている。

それに、少ししか痛んでなかった良心が、激しく痛み出したし。

「わかったから！もうちょい遊ぶから！だから泣きやんでよ！」

「言ったね。遊ぶって言ったね。言ったからには遊んでもらうから！」

顔を上げた真紀の目には、もう涙なんか無かった。

そして、右手の中には目薬が。

やられた。お昼ごはんを食べてるときにもやられそうになった手にやられてしまった。

「よし！とりあえず、渡瀬君ちの花屋さんにも行きますか！敵地偵察は大事だよ！」

さっそうと歩き出す真紀に啞然とするボク。

「ちょ、ちよつとまってよ！どうして渡瀬んとこ行くのよ！？」

「え？だから敵地偵察だつてばあ！」

真紀は、はあーっと大きなため息をついていた。

「ていうかさ、今日の話を聞いてて思ったんだけどさ、レイは渡瀬君に会いたくて会いたくでしょうがないんでしょ？」

ぐさつと、胸に矢が刺さった気分。

たしかに、本当のことなんだけれども他の人に言われたらかなり恥ずかしい。

「ま、まあそうなんだけどね。けど、もしさ。三浦がいたらどうすんのよ……」

「確かにそうだけどね。けど、会いたいなら会ったほうが良いと思うんだよ。レイはさ、もっと積極的になるべきだと思うんだよね」

「それは、自分でも分かっているんだけど。たぶん、今三浦と渡瀬と一緒にいるのを見たら明日告白する勇気がなくなれると思うからやめときたいんだけど」

真紀はさっきよりも数段大きなため息をついていた。

「あゝもう、わかった！わかったわよ。そのかわり、絶対明日告白

しなよ？私はレイのこと応援してるんだから」

真紀の優しい気持ちが一ひしと伝わってきているのがわかる。さっき渡せのトコに行こうとしたのも、ボクが会いたいと思ってるのを感じたからだ。

応援してくれてるのも、全部全部ボクのため。

こんなに思われているのはすごくうれしい。けど、今すぐにその気持ちにこたえることが出来ない自分自身にイライラする。

「なあに、今焦らなくても明日が来たら決着つんだからもうちょっとの我慢だね。私ちよつと暴走してたみたい。ゴメンね」

顔の前で手を合わせて申し訳なさそうな顔をする真紀。

お願いだからそんな顔をしないで。その期待に応えられないボクが悪いんだから。

そう、ボクがこの期待に応えなくちゃいけないんだから。

「今日はありがとうね、真紀。明日、絶対うまくいかすから！良い報告するから待っててね！」

ぽかん、そんな擬音が聞こえてきそうな真紀の顔。

けど、すぐに意味を理解したみたいで、ニコツと笑ってくれた。

「うん！良い報告待ってるからね！」

満面の笑みで笑いかけてくれた。

その笑顔のためにも、明日ボクは渡瀬に告白する。

そんな決意を新たに固めて家路に着いた。

中編（後書き）

評価、感想などがあればいただけたらうれしいです。作者が飛び跳ねてよろこびます。

後編

白くぼやけた光景が目の前に広がり、うつすらと見える人影が二つ。

一つはボク、もう一つは渡瀬。

いったい何の話をしているんだろう？音なんて聞こえない。

ボクは泣いてるの？笑ってるの？わからない。

渡瀬はいったいどんな表情をしてるの？

目を凝らしたってそんなもの見えない。ただ見えるのは、ボクの胸に抱えてる花だけ。

その花は、小さなつぼみが今にも開きそうなのに、なかなか開かない。

だけれど、きっと花が咲いたらとても綺麗なんだろうな。

それが見たいと思った。けど、そのときに隣に渡瀬が居たらもっと素敵なんだろうな。

もっと、花を見たくて、渡瀬に近づきたくて、駆け足で二つの人影に向かって進んだ。

渡瀬は、ボクに気がついたみたいでこちらを振り向いた。だけど、渡瀬の表情なんて見えなかったんだ。……そこで、目が覚めてしまったから。

いったい、最後に渡瀬はどんな表情をしていたんだろう？

それがとても気になった。

今日はボクの誕生日だ。

さつき見た夢が頭から抜けて出て行きそうになるのを必死になつて食い止めようとしていたんだけど、どうしても食い止めることができなかった。一つだけ印象として残ったのは、最後に渡瀬の顔

が見れなかったこと。もしかしたら、これは何かの暗示なのかもしれない。今日、渡瀬に告白しても断られてしまうかもって言う予感。そんなものが、頭の中をぐるぐる回り続けて、ボクの決心を鈍らせていた。

そんな感情が渦巻いていても、今日はボクの誕生日。友達からの祝福の言葉をメールで受け取りつつ、『おめでとうメール』に返事を打っていた。

今日から17歳。特に感慨も無く年をとったという感じ。

というか、今更誕生日だからどうのこうのということは無いんだけどね。

「とりあえず、レイおめでと。けどね、もうお昼前だよ？誕生日なのにいつもと変わらないわね」

お昼ごはんの下ごしらえをしながらお母さんがニコニコしながら言ってきた。

「ん。ありがと。それより、今日の晩御飯、ハンバーグが良い」

「はいはい、いくつになってもレイはハンバーグが好きだね。腕によりをかけて作ってあげよ」

ボクの家は、いつからか忘れてしまったけれど誕生日の日は晩御飯をリクエストしたものを造ってくれるというシステムになっている。そして、お母さんの料理はおいしいからこの日が結構楽しみであったり。

「そういえば、昨日買ってきた服かわいいね」

「あゝ、あれね。友達に選んでもらったの」

そういうと、お母さんは含みのある顔を向けてきて

「友達って、ちょっと前までよく来たりしてた男の子？」

「やあゝとした顔をしてボクの回答を待っている。」

「違うってば。真紀っていう子だよ。それに渡瀬とは最近遊びに行っていないし」

「そうなんだ。てっきり付き合ってるんだと思ってたんだけど。レイも隅に置けないなって思ってたんだけどね。残念」

そういうとお母さんは洗濯物を干しに行くといってリビングから出て行った。

ボタンと音を立てながら扉が閉まる。

リビングにはテレビの中でしゃべってるタレントの声が響いていた。

その微妙な空間がボクの決心を鈍らせようとしてくる。

いつもと同じ日曜日のお昼過ぎの風景。このまま『いつもどおり』に過ごせば、もしかしたら渡瀬との関係も今までどおりで続けることが出来るかもしれない。

そんなズルイ考えが頭を支配しようとしてくる。

けれど、本当にそれでボクは満足なの？

満足かどうかなんて問う必要が無いくらいはつきりしてるんだ。なのにどうして決心が鈍るの？

それも簡単だ。考える必要すらない。決心が鈍る原因は『恐怖』だ。

渡瀬と今までどおりの関係を壊してしまうかもしれない。渡瀬にボクの気持ちを拒否されるかもしれない。

たぶん、今のボクにとってそのことがとても怖いんだ。

だけど、このまま今日という日を過ぎてしまうとこの気持ちは永遠に伝えられないような気がしてくる。今日は誕生日、ボクにとっては少しだけ特別な日。そんな日に勇気をもらってこの気持ちを伝えないとボクは……きっと伝えられない。

そう心の中で思っただけでも行動に起こせないボクは臆病者だ。

お母さんが作ったお昼ご飯を食べた今現在、時計は13時半を指していた。

まだボクは行動を起こせないままだけど。

「ほら、レイ。家でごろごろしているとだめ人間になるよ？散歩にでも行ってきたらどう？」

同じく、ごろごろしてるお母さんが言うてきた。

「お母さんも、ごろごろしてるじゃん。だめ人間になるよ？」
ぐるりと寝返りを打って、テレビからボクに向き直った。

「お母さんはね、家事で働いてるから良いのよ。けど、レイはなに
もしてないでしょ？ほら、お母さんの勝ち」

にこーっと笑うお母さんは、どうみても小学校の子供がするような表情だ。

…実際は40過ぎたおばさんなんだけれども。言ったら怒られるから、言わないけど。

「はいはい、じゃあ散歩にでもいけばいいんでしょ？」

半ばやけになりつつも、外に出る口実が出来てしまった。

揺らいでいた決意が、まだゆらゆらと揺れているのに外に出てしまつていいんだろっか？けど、出かけないことには渡瀬に会うことも出来ないし。

まあ、少しくらい外を歩いた方が良く考えが浮かぶかもしれないし、ちゃんと告白する心の準備も出来るかもしれない。

そう考えると、散歩も悪くないなと思えてきた。それだったら、せっかく外に出るんだから、昨日真紀と買った服でも着ていこうかしら？そんなこと考えつつ、自分の部屋へ戻った。

さっそく、昨日買った服を取り出してみる。

ボクには似合わないそんな真っ白なワンピース。こんなのが似合うのなんて、どこかしらのお嬢様とかくらいだ。

「どうして、こんなのを真紀はボクに着せようとするかなあ？」

一人で愚痴つてしまう。自分で似合わないとわかってるものをわざわざ着るなんてバカげてる。

けど、やっぱり友達が選んでくれた服というものはうれしいもので、一度くらい着てあげようなんて考えてしまう。

やっぱり、今日はボクにとってトクベツな日なのだから、少しくらいいつもと違うことをしてしまっても良いのかな？……今日はトクベツなんだ。だから今日くらい似合わないことをしてもおかしくないよね。

そう一人で勝手に結論付けて、ワンピースを着始めた。

現在の時間は2時を少し回ったところ。

セミの大合唱はすこしだけその音量を落としていた。

家を出てから大体10分くらい歩いたところ。いつもは自転車で通っているんだけど、久しぶりに歩いてみると結構な距離に感じてしまう。

そして昨日に引き続き、自己主張が激しい太陽の攻撃が降り注いでいた。

「あ、あつい……」

お母さんに追い出されるように家を出て、散歩を始めたのは良いんだけど、行き先設定を間違えてしまった。

どうして、久しぶりに昔遊んだ公園に行こうだなんて思ってしまったんだろう。10分前の自分をけり倒してやりたい気分だ。

まあ、目的地の公園は目と鼻の先なんだけどね。

小さいときによく遊んだ公園は、昔と全然変わっていなかった。小学生くらいの子供たちが元気にはしゃぎまわっているのがよく見える。もともとそんなに大きな公園ではないんだから見えて当たり前なんだけど。

数少ない遊具には少年少女たちが群がっていて、さながら戦場のようだ。

ボクは、日陰になっているベンチに腰をかけてその様子を見ていた。

「ほんと、子供って無駄に元気よね」

気がついたら、言葉が口から零れていた。

子供たちの保護者が近くにいたんだけど、ボクの発言を特に気にした様子は無い。

子供たちの保護者たちは日陰には入らずに、日向でおしゃべりを続けている。

こんなに暑いのにどうしてそんな風にしゃべっていられるんだろう？そんな疑問が頭をよぎったんだけど、どうでもよくなってるのを辞めた。

さんと光り輝いて降り注ぐ太陽、耳をつんざくような大きな大合唱をするセミの鳴き声、何処までいけそうな気がしてくる青空。どれもこれも、夏という季節を精一杯放ち続けている。

だけど、ボクの心はこの太陽みたいに輝いていないし、ボクの感情は驚きや感動の音なんて久しく鳴らしていないし、ボクの気持ちは何処にもいけない大雨ばかりが降っている。

夏とは全く逆の位置にボクは存在してる。

原因は何か？

その質問に答えるのは簡単だ。

原因を取り除けば良いんじゃないか？

それが出来たら、とっくにしてるよ。出来ないから、こんな格好の悪い気持ちを引きづり続けてるんだ。

葉山麗、お前は何がしたいんだ？

……ボクは何がしたいんだろう？

一人、自問自答。結局自分の気持ちは自分でさえも把握していない。

ここに来たら、何か結論が出るかもって言う期待はあった。けど、実際は家で一人考えているのと変わらない。環境を変えたって、ボク自身が変わっていないんじゃないのも変わるってないのと一緒にゃん。

はあ、心の中で一つだけ大きなため息をつく。

ふと、視線を上げると、さっきまで日陰だったところに太陽が当たっていた。

そこには、色とりどりの草花が元気に咲き誇っている。

黄色っぽい花を咲かせている草花が目に入った。

これは、ニッコウキスゲ、ボクの好きな花の一つ。

一つの花は一日でしぼんでしまっただけ、一つの茎にたくさんつぼみがあつて順番に咲いていくつて言う花。

『明日があるよ』つて励ましてくれてるみたいで好きだ。

たしか、この花も渡瀬の家の店においてあつたような気がする。ほんと、渡瀬の家の見せにおいてる花は、ボクの好みの花ばかりだ。

初めてあの店を訪れたときもそうだった。あれは、去年の夏休みごろだったと思う。

高校1年生になり、今までの自分から抜け出たくていろいろしていたんだけど、何をやっても空回り。だんだんボクの周りから人が離れていっていた時だ。

あの時は、全然花に興味は無かつたんだけど、渡瀬の店の前を通つたんだ。……あのときは渡瀬の家だなんて知らなかつたけど。

そしたら、ほかの花屋とは違って花が輝いて見えたんだ。気のせいかもしれないけれど、そのときのボクの目には確かに輝いていたんだ。

そして次に目に入ってきたのは、その花を楽しそうに育ててる加奈子さんだった。まあ、加奈子さんは渡瀬のお母さんだったんだけどね。

気がついたら、ボクは加奈子さんに話しかけていた。どんなことを言つたのかまでは覚えていないんだけど、とても優しくボクの話聞いてくれた。

たぶん、そのときのボクの話し方もぶっきらぼうですごく嫌な気持ちにさせたかもしれないけど、それでもちゃんと最後まで聞いてくれて、ちゃんと答えてくれたつてことがボクにとってはとてもうれしいことだった。

それからだったかな？加奈子さんのところに出入りし始めたのは……。

いろいろあつたんだけど、加奈子さんのススメで花に話しかけて人と話す練習もしたつて。いろいろと、花の勉強もして自分で育て

る喜びとか楽しさとかをいっぱい教えてもらった。

めげそうになったこともいっぱいあるんだけど、やっぱりボクも人並みに楽しい高校生活を堪能したい。その一心でがんばってた様な気がする。

その頑張りに目を留めてくれたのが渡瀬だ。始め屋上に呼び出されて告白されたときは、馬鹿にされたような気がしたし、笑われている気もしてた。けど、あいつの真剣な気持ちとかがあいつの言葉一つ一つから伝わってきて、本気でボクのことを好きになってくれたんだと感じた。

もつと渡瀬のことが知りたくてボクからお昼ご飯を食べに行こうって誘ったんだっけ？そこでもいろいろ話したなあ、渡瀬の嫌いな食べ物とか嫌いな食べ物。

どうしたらもつと人と楽しく過ごせるようになるかとか。確かあのときに、毎週どこかへ出かけながら人と接する練習しないか？って提案してくれたんだっけ？

毎週出かけるようになって、渡瀬としゃべるようになって、そのお陰でボクは2年生になってから、友達が出来るようになったんだ。ほんと、渡瀬には感謝してる。この気持ちは本当だ。

けれど、2年生になってボクに友達が出来たように、あいつにも新しい出会いがあった。それが三浦だ。

ゴールデンウィークが明けたくらいから、三浦が渡瀬にくっつくようになってきて、とにかくイライラした。

ボクは、どこか油断していたんだろうね。渡瀬を好きな人がほかに出てくるはずが無いって、けど、魅力の無い人ならボクも好きにならないはずなのに。

三浦の出現がボクの気持ちを加速させたんだ。渡瀬が痺れを切らして、また告白してくるのを待っているつもりが、いつの間にか、渡瀬の気持ちがボクから離れていた。

まったく、笑えない話だよ。一番大事で一番欲しかったものをいつの間にか無くしてしまうなんて。

それでも、渡瀬は優しい奴で一昨日みたいにボクを気にかけてくれている。

そういう渡瀬の行動が、ボクにまだ気があるんじゃないかって言う期待をさせてくる。だけど、渡瀬の普段の行動を見ていたらボクに気がなくなっただのは一目瞭然だ。だけど、ボクが渡瀬を好きだっという気持ちは、変わらなかった。むしろ、加速度的に肥大化を繰り返して、もうどうしようもないくらいに膨れ上がってしまった。ボクはこの気持ちをどうにかしないと壊れてしまう。ストーカーなんて犯罪じみたことなんてしないけど、それでもこのままじゃ何処にもいけない。せつかく渡瀬がボクに開いてくれた道はたくさん有るのに、ボクが立ち止まっていたらなんにもならない。

だから、ボクはこの気持ちの結末がどういうものであれ、受け入れないといけない。

……ああ、そうか、ボクは結末を知るのが怖いんだ。

だから、今もこうして逃げてる。今日はボクにとってトクベツな日なのだから、勇気を振り絞ろうって昨日決意したはずなのに、逃げちゃってたんだ。

馬鹿だなボクは……自分の気持ちから逃げた結果が今の状況なのに、学習能力が無いんだ。

ふと、自分の思考から現実にも目を向けるとニッコウキスゲがこっちを見ているような気がした。

……そうだね。明日があるもんね。ボクがんばるよ。

そう心で呟いて、次にとるべき自分の行動を決めた。

公園に着てからいつたいどれくらい時間がたったんだろう？この公園には時計というものが存在していないので、確かめる術が無い。無いって言うても、公園には無いという意味で、自分のもっている携帯電話の時計を見れば時間を知ることくらいは出来る。

まあ、今ボクはこの時間を楽しんでいるんだから、わざわざ現実に戻るような行為をするつもりは無いんだけどね。

遊んでいた子供たちが、親にお菓子をねだって公園から出て行ったのがついさっきだから、たぶん3時を過ぎた頃なんだろうと思う。ボクが公園に着いたのが2時すぎだから、大体1時間をこの公園で過ごしたことになる。

結構飽きっぽいって言うのを自称しているんだけど、1時間もベッチに腰掛けてボーっとしているなんて、ボク自身が驚きだ。

太陽も2時過ぎに比べたら幾分傾いていて、ベンチに被っていた影もその範囲を広くしている。

さて、1時間もここに座って何をしていたか？

自分自身、大したことをしていない。遊んでいる子供たちを眺めて、軽く癒されたような気がする。

自分の子供なんて生んだことも育てたこともないから、親の気持ちなんてわからないと思うけど、見守るっていう行為が少しわかったような気がした。

そして、花壇に植えられた花を見ていた。

よく見ると、最近植えられたらしく、土の色も新しい土を足したのか、色がまだ馴染んでいない。

それでも大事に植えられたのがわかるくらい、丁寧に植えられていた。

そして、そこから渡瀬を連想して、今の自分の気持ちを整理していったんだった。

結局のところ、答えなんて初めから決まっていたのかもしれないけど、その答えが導き出す結果を知るのが怖かったんだ。それに、再確認したことがある。

それは、ボクが渡瀬を好きだった事。

この恋がどんな結末を迎えようとも、ボクはそれを受け入れる。たとえこの気持ちを受け取ってもらえなくても、そこからボクは

歩き出さなきゃいけないんだから。

このまま立ち止まってちゃいけないんだ。

自分自身に気合を入れて、自分の両足に力を入れて立ち上がろうとしたその時、公園の入り口に二人分の影が伸びていた。

これを偶然と呼ぶんだろうか？

会いに行こう、そう思っていた相手が、今日の前に居る。

けど、その隣には……三浦が居た。

「あれ？葉山さんじゃん！奇遇だね？何にしてたの？」

左右二つの三つ編みを揺らしながら、わざとらしく首をかしげる。その隣で、目を丸くしている渡瀬が居た。

少し……いや、かなり動揺した表情の渡瀬。それはそうだ。ボクとの約束を蹴ってまで、三浦と会っていたんだから。

ボクと渡瀬に特別な関係なんて無くても、後ろめたくなるのは仕方ない。

それに、ボクだってショックを受けてる。

そりゃ、多少予想は出来ても、実際目の前で見せ付けられたらかなり胸が苦しくなる。

「ん？渡瀬君と葉山さん、見詰め合っちゃって何してんの？」

かなり、うざく話しかけてくる三浦。心なしかすこし、イライラしてるみたい。

けど、そんなの全く気にならないくらい、ボクの心は静まっていた。

ボクは、前に進みたいだけなんだ。渡瀬がどう思っているに関係ない。ボクは、ボクの為に伝えたいんだから。

渡瀬は気まずそうに、口を開いた。

「いや、その、なんていうか、ごめんな」

「何で謝んのよ。別に、ボクはとやかく言うことじゃないし。」「何に謝っているのかも、わかってる。」

けど、ほんとにそんなの今はどうでも良かった。

そして、ボクが口を開きかけたときに、三浦がかぶせてしゃべっていた。

「そうそう、葉山さんがとやかく言う筋合い無いよね。今、二人の世界に入ってたみたいで、私が邪魔みたいになってたけど、実際邪魔なのは葉山さんなんだよ？はやく、渡瀬君を解放してくれない？」
「なに言ってるんだよ。別に邪魔とかじゃないだろ？そんな言い方はないと思うぞ？」

「邪魔だから、邪魔って行ってるじゃん。ほら、花壇に花を植えるんでしょ？早くしようよ」

そういうと、三浦は渡瀬の手を引いて花壇まで歩いて行こうとしていた。

渡瀬はこっちを向こうと必死だったけど、強引に連れて行かれていた。

三浦の言ったことは、確かに正しい。今、この状態を見ればどちらが邪魔者かなんて、一目瞭然だ。今のボクはただの邪魔者。確かに邪魔者だ。だけど、邪魔者には邪魔者なりに考えや気持ちがある。相手の言っていることが正しいからといって、引き下がれない。今のボクは、引き下がっちゃいけないんだ。

それに、この花壇を造ったのが渡瀬だと聞いてやっぱり思っていた。

こんなにも、暖かくて、優しくて、花たちが生き生きと咲いているんだ。

この花壇を造ったのは、とてつもなく優しい人。それが、渡瀬だと分かって安心した。

この人を好きになって良かった。

「確かに、ボクは邪魔だよ。それは分かってる。わかってるけど、一つだけ言わせてほしい。」

渡瀬と三浦が同時に振り向く。

文句を言おうとする三浦だけど、この言葉だけは邪魔させない。

これは、ボクのけじめ。ボクのスタートの合図。

ボクは、お腹いっぱいに吸い込んだ空気一気に吐き出して、力いっぱいに叫んだ。

「渡瀬が好きだ！……！」

やっと言えた。

やっと渡瀬に伝えたいことが言えた。ずっとずっと言いたくて、けど言えなかった事。『好き』という言葉。この言葉をもつと素直に伝えていたらこんな結末にはならなかったのかもしれない。けど、こうなったのも自分が悪いんだから受け入れないといけないよね。どんな返事が来るかなんてわかりきってる。だけど、ボクはそれを受け入れるだけの覚悟をしてるつもりだ。

だけど、次に口を開いたのは、渡瀬では無かった。

「そうなんだ。だけど、残念ね。渡瀬君は今、私と付き合ってるの。だから、葉山さんは失恋ってこと！あははっはは、いきなり叫んじやってばっかみたい」

頭から冷水をぶっ掛けられた気分。高ぶっていた気持ちが、一気に地底深くまで沈んでしまった。

渡瀬のカノジョなのだから、それくらい言う権利がある。だけど、こういうのは渡瀬の口からちゃんと聞きたかった。覚悟していたはずなのに、ココロが苦しくなる。ふと浮かび上がったイメージは、夢で見たボクが抱えていた花が枯れていくイメージ。……そうか、あの花はボクの恋心だったんだ。

「そっか、そうだね。あんなに一緒にいたもんね。うん、わかった。ごめんね、デート中に。」

泣くな。泣くな！

そう思っても、目からは涙が止まらない。

覚悟していた痛みが、ズタズタにボクのココロを傷つけていく。もう届かない渡瀬を実感して悲しい気持ちがココロを支配する。

「三浦！なに言ってるんだよ！」

渡瀬、今更焦っても遅いよ。

もう、ヤダ。

もう、こんな顔、渡瀬に見せたくない。こんな泣き顔なんて見せたくないよ……

ボクは、渡瀬の言葉なんて聞かずに家に向かって走り出していた。

ボクは、失恋した。

けど、これでボクは次に向かって歩き出せる。

今日は、力いっぱい泣こう。明日から、笑って過ごせるように。

そう、明日があるんだから。

……そう思おうと思った。けど、そんなの綺麗事だ。

どれだけ、前向きに考えようとしても、涙が次から次から溢れ出してくる。

どれだけ、前向きに考えようとしても、悲しい気持ちがあふれ出して止まらない。

どれだけ、どれだけ……どれだけ渡瀬を想っていてもこの気持ちは届かない。

それが、とてつもなく悲しかった。

家に帰ってすぐに自分の部屋に引きこもった。

泣き顔なんて親に見せたくないか無いし。

昼真っから引きこもり、健全な高校2年生のすることじゃないね。けど、ボクは今外に出ることなんて出来ない。

一度決壊したダムは、中の水が全てなくなるまで流出する水を止めることは出来ないのと一緒にこの涙を止めるのも無理だ。

今日はこのままでいいや。

とりあえず、いろいろ疲れた。

ボクは、そのままベットに横になって眠ってしまっていた。

ボクの目を覚まさせたのは、携帯電話のバイブレーション。

腫れぼつたいまぶたをこすり、誰からの着信かも確認しないまま電話に出た。

「もしもし」

「あ、やっとでた！今レイの家の近くの公園にいるんだけど、渡瀬君がいるんだよ！今がチャンスだよ！ほら、早く来て！三浦が近くにいるけど、それは私が何とかするから」

そっか、まだ真紀に報告してなかったんだった。

「まだ居たんだ。せつかくだけごめんね。今日のお昼の3時くらいに告白して玉碎してきたところなんだ……ごめんね」

自分で言つて、また傷ついた。ほんとボクの心は弱りきってるみたいだ。

「はあ〜！？嘘でしょ！？絶対何かの間違いだよ！！ちよつと渡瀬君に聞いてみる。だから、レイも早やく公園まで来て」

「ちよつと待つてよ。振られたつて」

ブチつと電話が切れた音がした。

ボクの返事も待たないで切るなんて……

これじゃ、『行きたくない』なんて言つてられないじゃない。

振られたところに、また行くなんて、精神的にもきついんだけど。それに、たぶんまだ三浦も居るし……

それでも、行かないといけないんだろうな……

鉛のように重たくなつた体を無理やりに起こしていく準備を始めた。

ふと、時計を見ると午後5時半、あれから2時間半も眠つてたみたいだ。

渡瀬に告白するために真紀が選んでくれた服も、そのまま寝てしまったから、しわまみれだ。

こんなの真紀に見せたら怒るんだろうな。渡瀬には見せだし、こんなしわになつてももう良いかな。

どうせ、もう可愛い格好をしても、こっちには振り向いてくれないの確定だし。

「お母さん、ちょっと友達と公園で話してくる」

そうお母さんに声をかけて玄関を出た。

玄関においていた自分の自転車にまたがる。

外は夕方になりつつあるけど、まだまだ日が高い。

小さいときは、まだまだ遊べると思っていただけ、こうなっ
てしまえば太陽が沈むのはすぐだ。

まあ、暗くなる前には家に帰りたいとか考えていたりする。とり
あえず、待たせるのも悪いから急いで公園に向かいますかね。

お昼ごろは歩いて10分くらいかった公園だけど、自転車で
行けば5分とかからない。

夕方の少し涼しくなった風が頬を掠めていくのがすごく気持ち
が良い。

なんだか、お昼にあつた出来事が夢見たいな気分になってくる。
結果がどうであれ、受け入れなければいけない。覚悟はしていた
つもりなのに、受け入れたつもりなのに、涙は止まってくれなかつ
たけど。

それでも、ボクなりにけじめはつけたつもり。

だから、渡瀬に会うのもちょっと怖いけど、でも、逃げ出しても
仕方ないし。これからは一つの恋の終わりとして胸にしまって、友
達として渡瀬と付き合って生きたいし。

まあ、ボクなりに出した結論なんだからしっかりと自分自身で受
け入れないとね。

だから、みんなの前では泣かないようにしないと……

そんなこと考えながら自転車を運転していたら、あっという間に
公園についてしまった。

そして、公園には似つかわしくない怒声が響き渡っていて、入っ
ていって声をかけるなんて出来ないくらいすごい剣幕で怒鳴ってる
真紀がいた。

「どうして、どうして渡瀬君は何にも言わなかったの?! どうして

君は大事なことを言わないままで居られるのよ!？」

「どうしてって言われても……」

すごい剣幕で怒る真紀に、申し訳なさそうな顔をしている渡瀬。

一目見れば瞭然だ。真紀は、ボクが告白して渡瀬が断ったことを怒ってるんだ。

でも、仕方ないじゃない……。渡瀬はもうボクのことは好きじゃないんだから。なんとか止めたいんだけど、中に入れる雰囲気でもない。しばらく、様子を見ることにした。

「真紀? そんなに怒ること無いじゃない。どうせ、私が言わなくても渡瀬君が言ってたんだから。ね、私たち付き合ってるもんね」

何度聞いても胸が苦しくなるセリフ。二回目だというのに1回目よりも悲しくなる。

「渡瀬君がそんなだから、レイも三浦も勘違いするんだよ? わかってる!？」

「真紀? 私は勘違いなんてしてないよ? だって、渡瀬君は私が『付き合ってる』って言っても否定しなかったもん」

「だから、そこが渡瀬君の悪いところなの! どうして? どうしてそうレイに言っただけなかったの?」

「だからそれは……」

「三浦が居たから言えなかった? 向けられている好意をむげにして三浦を傷つけたくなかったから? ふざけんじゃないわよ! あんたのその態度のせいでどれだけレイを傷つけたと思ってるんのよ! ? レイ電話越しでもわかるくらい涙声になったのよ? あんたにわかる? レイがどれだけ苦しい思いをしてたか!」

「……」

とうとう渡瀬が黙ってしまった。

ボクとしては三浦と渡瀬が付き合っていないってことが驚きだ。

あんなにずっと一緒にいたのに付き合っていないなんて……

そして何より驚いたのが、真紀が声を上げて怒ったところを始めてみたから。真紀はどんなに怒っても声を荒げるところなんて見

たことが無い。

あんなに温厚な子がここまで声を上げて怒鳴ってくれる。ボクは良い友達持つことがうれしくて仕方なかった

話にひと段落着いたみたいなの沈黙があたりを支配していた。

ボクの為に怒ってくれた真紀のお陰でボクの心はだいぶと軽くなっていた。

真紀にお礼を言いたい。渡瀬から本当の答えを聞きたい。

その一心でボクの足は真紀たちのところへ向かって歩き出そうとしていた。けど、突然の笑い声でボクの足は立ち止まっていた。

「あつはははは、真紀も馬鹿じゃないの？」

「いきなり笑い出してどうしたの三浦？」

三浦の突然の豹変。

三浦本人以外全員が驚いていた。

三浦の笑い方は嘲笑というのが一番しっくり来る笑い方だ。真紀とは全く違う笑い方、人を馬鹿にするような笑い方。ボクはこの笑い方が嫌いだ。

「だってさ、渡瀬君も馬鹿だし真紀も馬鹿だから」

「はあ？なに言い出すのよ。意味わかんないんだけど」

「それを言うなら私のほうが意味わかんないよ。どうしてさ、振った相手と振られた原因を作った女の手伝いとかしてんの？誰がどう見ても、葉山さんより真紀の方が全然魅力的じゃん。渡瀬君もそうだよ、どうして真紀を振ったの？」

「私が振られたのなんて関係ないじゃない！渡瀬君は好きでもないこと付き合う気が無かったただだよ。ね？」

「俺は、好きじゃない奴と付き合う気は無いんだ。だから、田原の告白も断ったし、三浦とも付き合ってない」

初耳だった。真紀が渡瀬に告白してたなんて。かなり動揺した。ボクの動揺をよそに、三浦の話は続いていた。

「ふーん、その割には私との会話とかかなり楽しんでるよう見えた

けどね。話しかければすぐ時間を作ってくれるし、相談があるって言って休みの日に誘ってもちゃんと相手をしてくれた。これならすぐに落ちると思ったんだけどな。残念、なかなか渡瀬君は落ちなかったね。まあ、別に落としたところで私にメリツトなんてないんだけど」

「なに言ってるの？あんだ渡瀬君が好きだからずっと一緒にいたんじゃないの？」

「なにそれ、ありえないでしょ？全然好みじゃないし。というか、真紀からは感謝はされても怒られる筋合いなんて無いんだからね。真紀の代わりに葉山さんと渡瀬君に仕返ししてあげたんだから」

「そんなの頼んでない！！どうして余計なことするの！？私は振られて、ちゃんと諦めた。レイとは友達だから、レイの恋はちゃんと見守りたかった。別にレイを恨んでなんか無い！」

「私はね。渡瀬君と真紀が付き合うのが良いと思うのよ。だけど、どれだけ真紀を勧めても渡瀬君は全くなびかない。真紀の魅力のわからない馬鹿は、私が精神的に叩き落してあげようと思ったのよ。付き合っただけでひどい降り方とか使用とか考えてね。まあ、私にもなびかなかったけど」

なに言ってるんの三浦。

三浦に対して怒りが浮かんできた。渡瀬にひどいことをするなんて許さない。

渡瀬はずっとニコニコして笑ってて、やさしさで周りを幸せにするような奴なんだ。そんな渡瀬の辛い顔なんて見たくない。涙なんて流させたくない。

「別にそんなこと言われても、俺は三浦に対して怒りなんて浮かばないよ。他人がどう思おうと俺は俺の考えで動いてるだけだし」

「お優しいことで、逆に私がやられていたら怒りでどうにかなりそうだけどね。私ね、真紀の事が好きなの。もちろん異性としてではなくて友達として。だから真紀が渡瀬君に振られて泣いてるのを見過ごすことが出来なかった。それがどうしても許せなかった。渡瀬

君には全然仕返しできなかったけど。葉山さんには充分出来たからもう私は満足かな。学校で葉山さんとは話をさせない作戦もうまくいったみたいだし。」

ボクのことなんかどうでもいい。どうして渡瀬はそんなひどいことを言われても平気なの？ボクは、君の悪口を言われるだけではらわたが煮えくり返る思いなのに。

さっきまで怒鳴っていた真紀も、突然の三浦の告白に黙ってしまっし。

多分、次渡瀬にヒドことを言われてしまったら、ボクは我慢できずに三浦に手を上げてしまいかもしれない。

それくらい、頭にきている。

「おい、それどう意味だ？もしかして、今まで相談とか言って話しかけてたのは全部、葉山への嫌がらせか？」

「今更気がついたの？やっぱり馬鹿ね。そんなの当たり前じゃない。私の大事な友達の真紀を泣かした奴にささやかなる復讐よ。まあ、それも昼間に済んじゃってもう良いかなって思ってるんだけど。普段無表情のクセに顔を真っ赤にしながら突然「渡瀬が好きだ！」とか叫んじゃってさ、聞いてるこっちが恥ずかしいよ。ほんと馬鹿だよ。それに、私が付き合ってるって言ったときの顔なんてやばかったよね。この世の終わりみたいな顔になって泣いちゃってさ、ほんと」

そこから先の三浦の言葉は聞こえなかった。

パンッ

何かがはじかれるような音がした。

少し遠くてもはっきりとわかる。三浦が渡瀬に叩かれたんだ。

「俺には仕返しても何でもしてもかまわない。だけど、葉山を馬鹿にするとか、傷つけるようなことは絶対に許さない！」

渡瀬の怒った声が公園中に響く。

どうして渡瀬が怒るのよ？ボクが晒わらわれているだけなのに……
そんなことされちゃったら、ボクは渡瀬のことあきらめ切れない

じゃない。渡瀬の気持ちだが、まだボクのほうを向いているって勘違いしてしまうじゃん。

三浦にビンタなんて、男の子が女の子に手を上げるなんてしちゃだめじゃん。そんなの渡瀬らしくないよ。

いろんな言葉が、頭の中で渦巻いてぐるぐると回っていて混乱しているんだけど、一つだけ確かなことがある。

それは、たった一つだけだけれども、ボクを想う言葉を聞けたってこと。ボクの為の行動、それだけでうれしくて仕方が無い。

「ほんと、渡瀬君は馬鹿だよ。今更私を殴ったところで、葉山さんの心の傷は消えないって言うのに」

そう吐き捨てるように言うと、三浦はボクが入ってきた入り口とは逆方向の出入り口に向かって走っていった。

「ほんと、渡瀬君はレイのことになると不器用になるよね。今の渡瀬君は優しいさのかけらも無いよ？ 全く、はじめからそういう風にしておけば、誰も傷がつかなかったのに。とりあえず、三浦のフォロ―は任せておいて。君のお姫様がお待ちかねだよ。」

そういうと真紀はこっちをむいてウィンクをしてくれた。というよりも、ボクが来てたのに気がついていたんだ……、そっちのほうに驚きだ。

真紀は、そのまま三浦が消えた出入り口に走っていつてしまった。ものすごく気まずい渡瀬との二人つきり。

今までは、この二人という空間が心地よかったんだけど、いまはさっきのやり取りを見てしまった後だし、なんか妙な緊張が張り詰めていた。

「その……聞いてたのか？」

渡瀬はボクに向き直り問いかける。

「うん。まあ、聞いてたかな？」

少し申し訳なさそうに目を伏せながら渡瀬は口を開いた。

「ごめん。傷つけるつもりなんて無かった。けど、結果的に傷つけてしまった。ほんとに、ごめん」

「そんなに謝らないでよ。けど、本当に辛かった。三浦と渡瀬が付き合ってるって聞いて本当に辛かった。けどね、さっきボクの為に怒ってくれたじゃん、だから帳消しにしてあげる」

「謝っても謝り足りないくらいひどいことをした。葉山に許してもらっても俺が俺を許せないよ……。だから、もう葉山とは会わないホントは、葉山に会えないのは物凄く辛い。だけど、傷つけてきた相手なんか葉山も会いたくないだろし……」

気がついたら想いつきり右手を振りかぶっていた。

ゴンッ

さっきとは全く違うとつても鈍い音が響いた。

目の前で渡瀬は鼻を押さえながら悶絶してる。

というか、あまりの不意打ちでなんにも準備が出来ていないまま殴られたものだから、そのまま後ろに倒れて転げまわってる。

「なに芋虫ごっこしてんの？子供じゃないんだからそんな遊びか足したらだめだよ？」

葉山は目に涙を貯めながら抗議をしてくる。

「誰のせいでこうなったんだよ！？ていうか、平手打ちじゃなくてグーパンチかよ！？」

「当たり前よ。馬鹿な子は馬鹿だから叩かれてしつけされないと覚えられないでしょ？痛みと一緒に今回のことを覚えておきなよ。そして、少しは賢くなれるんじゃない？」

「ひどい！いまのはかなり酷いぞ！俺なんでそんなに邪険に扱われてんだよ……って、原因は俺か……それじゃしかたない……な」

さっきまでのテンションはどこかに飛んでいったみたいで一気にしよげ返る。

ほんと、馬鹿だ。それにボクは、こういう風に、何でもかんでも自分のせいにして、不幸の主人公を気取る奴が大嫌いだ。

「渡瀬」

いつの間にか立ち上がっていた渡瀬を呼ぶ。渡瀬はうつむいている状態から、こっちに向き直る。

素直な奴だ。無防備な相手を殴るのには少しだけ抵抗を覚える。けれど、今はそんな余裕ボク自身に無いのだからこれは仕方のないこと。

ゴスッ

さっきのよりもさらに鈍い音が公園内に響き渡る。

といつても、音が引くいたためかそれほど広がってないけど。

「うぐっ……」

一テンポ遅れて渡瀬の悲鳴が響く。

ボクの右ストレートが葉山のみぞおちにクリーンヒットしたから。というか、全力で見舞いしてあげたからだ。

「本当に馬鹿よね。なにいじてんの？俺のせいだから？俺に会いたくないだろって？」

「だってそうだろ、泣くくらい酷いことされたのにまた会いたいと思う奴いないだろ」

「いるわよ！こ・こ・に！！ボクの気持ちを手勝手に決めるな！！悪いと思うなら、酷い事したい以上にうれしい事をしてよ！！ボクに会えないのが渡瀬にとって辛いって？べつに渡瀬が辛がるうがかまわない。けどね、ボクにとって渡瀬に会えないって言うのが一番辛い！！ものすごく辛い！！まだボクに酷い事したいの！？このドSの変態野郎！！」

渡瀬はお腹の痛い身を忘れたかのように、猫が驚かされたかのように目をまん丸にしていた。

自分が言っている意味を自分自身実感してきてかなり恥ずかしいけれど、ここで恥ずかしがったりしたら全然格好がつかない。

なら、ここは勢いでやり過ぎすしかない。

「女の子にここまで言わせてんのに、何か言うことないの？もしないとか言うなら、ヘタレ決定だからね！」

ここで、一呼吸間に挟む。恥ずかしさのあまり、意味不明なことを口走ってしまっていた。

すうゝはぁゝ、まずは深呼吸。よし、ちゃんとボクが言葉にしな

くちやいけないんだから

「……なんか意味不明なこと言ってた。待たせてたのはボクだったよね……あのさ、渡瀬。ずっと待たせてゴメンね。それでさ……昼間の答え聞きたいんだけど……」

渡瀬の瞳にはとても暖かい色が浮かんできていた。ボクを安心させる色。ボクを安心させる空気。そんなものが渡瀬の周りには満ち溢れていた。三浦が現れるまでの空気。とても懐かしい。

ボクの恋心の花を育ててくれた、その空間。さっきまでは、枯れかけていたボクのココロの花がいつの間にか、元気になっていて、今にも花を咲かせようとしている。

「こうして言われると、答える方って物凄く気恥ずかしいものなんだな。」

そういうと、物凄く照れくさそうに笑っていた。

そんな渡瀬の表情一つでボクのココロはとても揺れる。なんていうか、……キュンってなる。

そんな、ボクはお構いなしに渡瀬は話を続ける。

「俺の気持ちは、あの時から全然変わらず、葉山が好きだ。この状況で俺から言うのはおかしいかもしれないけど、付き合ってくれないか？」

ボクがずっと待ってた言葉。けど、ボクが行動を起こさないと云われない言葉。

初めからボクが素直になっていれば、この言葉をもっと早く聞くことが出来たのかもしれない。けど、今はもうそんなことどうでもいいんだ。

ずっと、ずっと欲しかった言葉を言ってくれたんだから。

けど、渡瀬は馬鹿だ。態度ではすぐわかるくらいに示していたつもりなのに。

それでも、ボクはこの馬鹿が好きだ。

それはもう、隠しようも無いとても大切な気持ち。

なら、ボクはどうするか。そんなのもう決まってる。

ボクは、渡瀬の胸に飛び込んでいた。

渡瀬はそんなボクを優しく包み込んでくれた。

「まってたよ、その言葉」

ボクの心は温かい気持ちでいっぱいだ。

今までずっと育ってきた、ボクの心を暖かくしてくれる大事な花。ボクの中で育っていた小さなつぼみだった恋は大きな花を咲かせていた。

「もう離さないで、寂しくしないで、ボクだけを見て」
いままで感じていた不安感が口からこぼれる。

「俺のお姫様はわがままだな。これからは、そんな不安感ることなんて無いくらい、楽しくしてやるよ。うつとういくらい一緒にいてやる、うざったくなるくらい葉山だけを見てやる。嫌がったって離してなんかやるもんか」

渡瀬はやさしくボクの不安を拾い上げて、消してくれる。

ボクの待つていた言葉をくれる。

うれしいって言う気持ちでボクの心はいっぱいになって満たされていく。

悲しい気持ち涙のダムを決壊させるように、うれしい気持ちが涙のダムの許容量を超えてあふれてくる。

今まで流した涙とは全然違う。暖かい気持ちがあふれた涙。

何でだろう、すごく安心する。

ボクは優しさに包まれたまま、うれしい涙を流していた。

「渡瀬って、たまに物凄く気障になるよね。けっこうキモイよ。…」

「まあ、そういうところも好きだったりするけどね」

ボクの一言多い言葉にも嫌な顔一つもしないで、笑っていてくれる。

そんな些細なことがすごくうれしくて、ぎゅっと抱きしめる。

渡瀬もボクと同じように力を込めて抱きしめてくれる。

今のボクは、この世界の誰よりも幸せかもしれない。

ボクは今、渡瀬と一緒に自転車を押しながら歩いてた。

目的地は渡瀬の家。どうして向かっているかというと、渡瀬が来てほしいからの事。

いきなり加奈子さんに紹介とかされるんじゃないだろうか？

そんな一抹の不安を抱えながら渡瀬のほうを見る。

さつき三浦にビンタしたときの怖い顔はどこかへ行ってしまったている。

いつものにへら顔。このいつもの顔がとても安心する。

「まあ、なんていうんだろ。とりあえず、いろいろごめんな」

「え？なにいきなり謝ってんの？何に対して謝られているのか心当たりがありすぎてどれかわかんない」

「えっ？そんなに俺、葉山にあやまることあるの？！」

「いきなりテンションあげないでよ。なんかうざいよ？」

「なんかすんごく俺嫌われてない？さつきまで、顔真っ赤にしながら俺に抱きつきながら泣いてたくせに」

ドスッ

とてもとても鈍い音が薄暗くなった住宅街に響き渡った。

そして例の如くお腹を抱えてうずくまる渡瀬。

「まったく、どうして渡瀬はそんなに殴られるのが好きなの？やっぱり、Mな感じで変態さんなの？」

「……俺は、殴られたくて殴られてるわけじゃない！変態にしないでくれよ」

最後の一言はもう泣く寸前くらいな感じで鬼気迫るものがあつただけれど、ボクに恥ずかしいことを思い出させるほうが悪い。

あれは人生最大の失態だ。あんな少女漫画のような行動をとるなんて自分でも信じられない。

「べ、べつにあんたの為に殴ったんじゃないんだからね！！」

「いやいや、葉山そんなキャラじゃねえし。というか、絶対自分の

ためだろ」

たまには、正直に言っておかないとへんな勘違いされちゃうよね？

「……渡瀬が恥ずかしいこと言うから」

たぶん、今ボクの顔は真っ赤になってると思う。

まあ、周りはずいぶんと暗くなってるし、見えては無いと思うけど。

そう思いながら、渡瀬のほうを見る。

するとどうだろう。渡瀬のほうが顔を真っ赤にしていた。

「うん、今の葉山はさっきまでとのギャップで破壊力抜群だ。」

「意味わかんない」

意味は分かってるけど、かなり照れる。

はいはい、渡瀬はそう呟いてボクの隣を歩いていた。

それから、ボクらは渡瀬の家に着くまで無言だった。

だけど、その無言はとても心地が良い空気で、ただ一緒に居られる、それがすごくうれしかった。

渡瀬の家について、10分くらいがたっただろうか。

一度店の奥に入り、戻ってきた渡瀬の手の中には一つの花が咲いていた。

それはそれはとてもとても綺麗でかわいい花だった。

「はい、これ。葉山にプレゼント。今日、葉山の誕生日だろ？」

「あ、ありがとう」

その花を受け取る。

その花は、ボクがずっと欲しくて欲しくてたまらなかった花の胡蝶蘭。

その美しさに目を奪われたのはいったいいつだっただろう。

だけど、やはりというか、高校生のボクがおいそれと帰るような値段ではなかった。

一時期アルバイトも考えたものの、両親のアルバイト禁止という厳令によりあえなく敗退。

お小遣いを少しずつためて買おうと思っていたんだけど。

欲しいものを好きな人がくれるって、ものすごく幸せなことだと思う。それに、ボクのココロはまた、ふわりふわりと舞い上がってしまった。

それこそ、今ここで渡瀬に抱きついてしまいたいと思ってしまうほど。

まあ、実際に抱きつくなんて恥ずかしいこと今は出来ないけれど。「あのさ、どうしてボクの誕生日知ってたの？」

ボクの質問に渡瀬は頬を掻きながら答えた。

「田原に聞いたんだ。やっぱり、好きな人の誕生日には何か送ってあげたいもんでしょ」

「けど、胡蝶蘭って結構良い値段するんじゃない？」

そう、胡蝶蘭は高いのだ。それも、高校生がおいそれと買えるような値段じゃない。

「そうなんだよ。おかんに値段聞いてびっくりしたよ。そのおかげで、店の手伝いで土日がつぶれて全然葉山と遊びにいけないし、学校じゃ三浦がずっとしゃべりかけてきて葉山のところに行きにくいし」

「もしかして、土曜日、日曜日に遊びにいけなくなったのって、お店の手伝いしてたから？」

「そうそう、そのとおり。ほんと参ったよ。まあ、おかげでちゃんと葉山にぴったりの花を渡せてよかったけど」

そういうと、またニコツと笑ってくる。

ボクは、勝手に想像して勝手に嫉妬して、勝手に渡瀬のことを決め付けていた自分が恥ずかしい。

ほんと、馬鹿だよな。ちょっと聞いたらすぐわかることなのに。

「胡蝶蘭は可愛くて、綺麗だけど、ボクは全然そんなじゃないよ」そうこれは、本当のこと。ボクの心の中はずっと乱れてすさんで目も当てられない状態だ。

「なに言ってるんだよ。葉山はずっとずっと輝いてるよ。胡蝶蘭のよ

うに綺麗だよ。ずっと見てきた俺が言うんだ間違いないよ」

「それでも、ボクの心の中なんて渡瀬にはわかんないでしょ？ 渡瀬が思うような良い子じゃないんだよ。ボクは……」

「葉山がどう思っているにも、俺の目には葉山は見た目者だけじゃなく、心もすんごく綺麗にしか写らないよ。というか、友達ができはじめてもつと綺麗になったと思う。心から楽しいって言う気持ち伝わってきてこっちまでうれしくなってくるくらいだよ」

ほんとこの男は恥ずかしいことをスラスラと言って来る。

だけど、ボクだって女の子だ。こんなこと言われたら、うれしいに決まってるじゃん。

それも自分が好きな人に言われるなんて、ほんと……夢見たい。

「ん？ どした？ いきなりうつむいて？ もしかしてうれしすぎて泣いちゃった？」

「そんなわけないじゃん！ 渡瀬はデリカシー無いってよく言われるでしょ？ほんとサイテー！」

顔を上げたボクは頬に暖かいものが伝ってるのを感じた。

というか、それを隠すためにうつむいてただけけれども。

すまなさそうに謝りながら笑う渡瀬。

どうしてこの人を好きになったんだろう？

いや、違うな。

こういう人だからボクは好きになったんだろう。

こんなにもデリカシーの無いくせに、大事なところはしっかりと分かってて、こんなにも鈍感なくせに大事なところで鋭くて、こんなにも子供みたいな奴なのに大事なときにはオトナになって、こんなにも馬鹿だから一生懸命にプレゼントを用意してボクを喜ばせようとしているのに、そのセイでいろいろな勘違いとかさせたりとかしてさ……

「ほんと、渡瀬って馬鹿だよな」

「いきなりなんだよ、デリカシーの無い物言いしたのは謝るけど、いきなりバカついていわれるようなことはしてないぞ？」

「そういうところが、馬鹿なんだよ」

それきり渡瀬から言葉は来なかった。

口をつぐんだ渡瀬の顔を見ると、とても穏やかな笑顔をしていた。

「葉山。好きだよ。これからよろしくな」

「まあ、そこまで言うなら付き合っただけでもないこともないよ？ボクだって鬼じゃないからね。ここまで迫られたら答えてあげないと可哀相だしね……」

ボクの言葉に答えないうまま、さっきと同じ穏やかな笑顔。

というよりも、ボクの考えていることが筒抜けでにやけてるって言うのが正解かな？

どうしてそういうところで鋭いのよ。そういうところが、ちょっとムツっとくる。

けれど、やっぱりこういうことはがんばって伝えないとだめだよ
ね。

「ボクは、ボクが相手を好きで、相手もボクのことを好きじゃないと付き合いたくない。……もう、ボクの言いたいことわかるよね？」

「いいや、全然わからん。だから、ちゃんと言ってくれないか？」

渡瀬のニヤニヤが変態の領域にまで侵入してる。

というか、変体オーラが増幅中。

「渡瀬、顔面が……終わってるよ」

「え?!それって、悲惨なくらい不細工って事?マジで!?!そんな
にヤバイ?」

バカな奴。そんなわけないのに。

ボクにとっては何よりもかつこよく見える顔。

ボクにとって君は何よりも大事なんだよ?

そういうところまでちゃんと言いたい。けれど……言えない。
だから。

ボクは、自分の顔をいろいろといじってる渡瀬の頬に両手を添えて、その唇にそっと自分の唇を重ねた。

口下手なボクからの最大の意思表示。

一番大事な君へ送るボクからの最高のメッセージ。

重ねた唇をゆっくりと離れた。

唇を重ねていた時間は一瞬だったか、それとも1分か一時間か、それすらもわからない。というよりも、時間なんて関係ない。

ただ、気持ちを込めて君に伝えるメッセージ。

「これが、ボクの答え。ちゃんと受け取りなさいよ」

ちらつと、渡瀬の顔を見ると、ボクにも負けなくらい顔を真っ赤にして機能停止していた。

10秒くらいたってから再起動。

「なんか、葉山にスゲー事された気がする。というか、俺のファーストキス奪われちゃった」

口を押さえながらも、うれしそうな顔を全開にしている葉山。

「ボクの初めてを渡瀬が奪ったんだから、ちゃんと責任取ってよね」
そういうと、渡瀬はいきなりひざまづいた。

よくテレビで中世のヨーロッパとかの物語の中の王子が、お姫様にするように、ボクの手を取り。

「お任せください。お姫様」

そういうと、ボクの手の中甲にキスをした。

じわり、との部分があったかくなる。

というか、恥ずかしい。これが、今の感想。

「そついうのちよつときもいよ？」

「……やっぱり？」

「自覚があつたんだ……まあ、渡瀬と居ると退屈しないで済みそう……ううん、違うな。渡瀬と居たら絶対ボクは楽しい日々が過ぎせ
ると思う。だってさ、今だってこんなにも世界が輝いて見えるんだ
よ？明日も絶対楽しいよ」

素直にそう思った。

素直に思ったことを口に出すことが出来た。

たしかに恥ずかしいことを言ってるかもしれないけれども、ボク
が今思ってることはこれなんだから仕方が無い。

「葉山ってちよつと詩人みたいだね。そういうところも好きだよ」

渡瀬が言ってくれる言葉一つ一つがうれしい。

ボクと渡瀬の関係がいつまで続くかわからない。

けれど、今ボクはこの関係がずっとずっと続けば良いなと思う。

こんなにもボクの世界を明るく照らして、見るもの全てを輝かせてくれる人なんてほかにいるとは思えない。

渡瀬にとって、ボクもそうであればもっとうれしいな。

「渡瀬。これからずっとずっとよろしくね」

この関係がこれからもずっとずっと続きますように、という祈りを込めて。

「おう！もちろんだよ」

大好きな君に送るメッセージ。

これが、ボクの人生最大の誕生日プレゼント。

後編（後書き）

これにて、ココロの花完結です。

ただ、ちょっとだけこの後日談が浮かんだったので、また出来上がった投稿したいと思います。

ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

さて、せつかくのあとがきなのでいま思っていることを赤裸々に無駄にお話したいと思います。

あとがきなんていらないぜ！ツて言う方、いらっしやると思いますが。

戻っていただいても大丈夫です。ここから先は作者の自己満足なので…

読んでいただいてありがとうございます！感想、評価などがあればよろしくおねがいます。作者が喜びますので！では次回作でお会いしましょう！

戻らなかったということは、私目のおしゃべりに付き合ってくれということですね。ありがとうございます！

ではさっそく、始めさせていただきます。

まず、このココロの花のですが、冷血王女の続編ということで作成したものです。

初めの構想ではこんなにも長くなる予定ではなかったのですが、あれよあれよといまに伸びまくって、これじゃあ短編には厳しいかな？ということで連載という形になりました。まあ、不定期でアップになりましたけれども…

自分なりに女の子のココロを考えながら練りこんだ葉山に結構思入れがあります。もちろん、渡瀬や、真紀、三浦などにも思入れはあるんですけどね。

この小説は、一人称だけで構成しているんですけども、一人の視点では人の動きや、周りの状況などの描写が物凄く難しく、うまく読者様に伝わっているのかとても不安であります。っていうよりも、自分の文才の無さにどれだけ嘆いたことか…。

それでも、完結までたどり着けたのは、感想を下さったり、お気に入りに入れてくれてる人がいたからです。とてもとても感謝しています。

さて、まだまだ伝えたい気持ちはいっぱいあるのですが、あまり長々と書いて読者様に苦痛をしいるのはいけないのでこの辺で。また次回作、がんばってつくったりしますので、機会があれば読んであげてください。

上の方でも書いたのですが、感想、評価などあればよろしく願います。作者が物凄く喜びまわります。

それでは、ありがとうございました！！

10年後（前書き）

これは、僕の中のイメージで葉山と渡瀬のその後になっております。もし、そんなの見たくない！ッて人がいましたら、飛ばしていただいても大丈夫です。けど、あの二人のその後が気になる！ッて方は、そのままお進みください。

10年後

セミが泣き喚き自己主張子繰り返す太陽。そのくせ、空には夏の雲が漂い物凄くすがすがしい。

吹きぬける風は、夏の香りがして暑いんだけど、懐かしい匂いを運んでくる。

今ボクは、店先で花たちのお世話をしていた。

今日、お店はお休み。休みで、お世話を怠るとすぐにしよげてしまっただ。まったく、人間以上に繊細かもしれないね。

この毎日花のお世話をする生活にも慣れてしまった。かれこれ、5年くらいかな？初めは、わからない事だらけだったのに、気がついたら自分ひとりで大体のことは出来るようになっていた。

それに、ボク自身花のお世話をするのが好きだしね。こうして、花たちに囲まれて生活することに幸せすら感じてしまう。

そんなことを考えながらジョウロを使って水を上げていたら、見知った顔が現れた。

「よっす！レイひさしぶり！！うわ、なんかすごい似合ってるね！そのエプロン！ただ、お花に水あげてるだけなのになんだかお花屋さんみたい！」

「久しぶり真紀。あと、お花屋さん『みたい』じゃなくて、お花屋さんなのよ？」

あれから10年の月日が流れた。

あれが何をさすのかというと、10年前の誕生日かな？そして、今日はボクの27歳の誕生日。

20台も後半に差し掛かり、すこしお肌のことが気になり始めた今日この頃。

10台のときは誕生日が待ち遠しかったのに、今ではすこし疎ましい。

というか、年をとるって言うのが嫌になってきたって言ったほう

がいいな。

「あは、なんか失言だった？」

そういうと、昔のように舌を出して笑っていた。

「真紀は高校のときから変わらないね。見た目だけは、すっかりキヤリヤウーマンなのに」

「そりゃあもう高校卒業して8年だよ？バリバリ仕事人間さ……って見た目だけって酷くない？」

そういつて笑う真紀は、高校のときと変わらず魅力的な笑顔をする。

真紀は、結婚間近の彼が居るとか。

さつさと結婚しちゃえば良いのに、仕事をまだ辞めたくないって言うことでプロポーズを先延ばしにしているらしい。

「ふん。まあいいや。とりあえず上がってよ。って言っても、なに出すお菓子無いけどね」

「良いよ良いよ。今日はレイの誕生日だからちゃんとケーキ買ってきたし」

そういうと、手に提げてた袋からケーキを取り出した。

「ケーキかあ……」

「私を買ってきたケーキじゃ不満ってわけ？うわ、酷いな。そんな事言ってる、友達なくすぞ？」

真紀の言っていることは、確かにそうなんだけど。せつかくもってきてくれたのに、こんな態度をとっちゃいけないことくらい分かってるんだけど……

「そういうんじゃないんだけどね。今、うちの中で……」

ケーキを作ってる。そう言おうとしたんだけど、家の中から大きな声が聞こえてきて黙ってしまった。

なにやら、台所のほうから黒い煙も見える……

「うわあああ、焦げたー！」

「しょーかしなきゃ！」

「あー！！水かけちゃだめだってばー！！凜ー！！」

家の中から野太い叫び声と、まだまだ幼い子供の声が聞こえる。
その声を聞いて真紀は苦笑い。

「なんか、相変わらず渡瀬君と仲良さそうだね」

「そうだね。あの日と変わらずって感じかな？っていうか、今では
ボクも渡瀬なんだけど」

こういうのはすこし照れくさい。

「あはは、そうだったね。もう、こんなところでのろけないでよ」
そういつて、真紀はボクの肩を軽く叩いてくる。こういう真紀と
のやり取りも久しぶりだ。とても懐かしい。

どたばたと、大きな足音と小さな足音が近づいてきた。

「悪い、レイ。ケーキ食べられなくなったから、新しいの買ってくるわ」

台所からボクの旦那のトオルが顔を出した。

その横には、愛しの愛娘の凜がいる。

今ボクのお腹の中には新しい命も宿ってる。

「別に良いよ。真紀がケーキを買って来てくれたから。ほんと、ト
オルは不器用だね。結婚してからまだ1回しか手作りケーキ食べ
れてないよ？」

「悪かったつてば、次はちゃんと練習しておくからまかせといてく
れ」

そういつと、トオルはにかつと笑った。高校のときから変わらな
い笑顔。ボクは、この笑顔が大好きだ。

この笑顔を見ると、大概のことは許してしまう。付き合った当時
からこいつには甘いんだ。それでも、結構楽しみにしていた手作り
ケーキ。次こそは食べれるようにと釘をさしておく。

「任せるとかはちゃんと成功してからにしてよね」

「相変わらず、ラブラブだね。見てるこっちが恥ずかしいよ」

物凄い笑顔の真紀。そういう風に指摘されるとなんだか照れてし
まう。

「らぶらぶ」

舌足らずな声で、そういいながら無邪気に笑う凜。トオルに似て、すごく可愛い笑顔だ。親バカだって言われてもかまわない。この凜の笑顔は最強だ。

10年前の誕生日から渡瀬との関係は変わることなく今まで続いている。

10年前の誕生日から変わらず、渡瀬と過ごす日々はいつも輝いていて綺麗に光ってる。

ボクは君に出会えて本当に良かったと思う。

だから、ボクは1年に1回の誕生日には言うようにしてるんだ。

ボクの素直な気持ちを

「そりゃあそうだよ。ボクはトオルのことが今でも大好きだもん」
誕生日だからって、もらってばかりじゃ悪いじゃん。だから、最高の笑顔でボクからトオルへのプレゼント。

「はいはい、ごちそうさま。まったく、どうして今でもバカップルで居られるかな」って、今はバカ夫婦か！まあ、渡瀬君とレイらしくて良いけどね」

そういつて、微笑む真紀。

照れ笑いをするトオル。

意味も分からずにはしゃいでる凜。

こういう風に、みんなで笑いあえる今の暮らしは幸せで満ち溢れている。

これからも、ずっとずっとずっとこうして笑い会える、家庭を築いていきたい。

10年前にボクのココロに咲いた花とは、また違う色を見せているボクのココロの花。

だけど、その花はあの時と変わらず、美しく咲き誇ってる。

この花はこれから先、ずっと枯れることは無いと思う。

どうしてって？

それはね。ボクが今、とても幸せだから。これから先も、きっとずっと幸せだから。

10年後（後書き）

読んでいただいております。後編を書いている途中に浮かんできたイメージを書いたのが、この10年後のエピソードです。蛇足かもしれませんが、僕の中ではこれでこの二人のお話はおしまいです。もし、感想・評価があればよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698m/>

ココロの花

2010年10月8日12時18分発行